

昭和⁵₅¹年 度

高槻市文化財年報

高槻市教育委員会

はじめに

古くから文化の栄えた本市には、わが国の文化・歴史の理解に欠くことの出来ない文化財が豊富に残されております。これらの貴重な文化財を保存・保護するため、昭和44年10月に、文化財保護条例を制定し、各分野の基本調査や発掘調査を実施してまいりました。

近年、産業経済の進展、社会構造の変化、特にわが国の伝統的な生活様式、風俗慣習が社会構造の急激な変化により、これら有形・無形の民俗文化財が急速に失われていく状況にあります。近年の急速な開発の波により、失われつつある民俗文化財を保存・保護するため、昭和51年度から文化財愛護推進員や市民の方々の御協力により、調査・収集を進めてまいりました。これまでに、収集した資料を本市文化祭事業の一環として、民俗文化財展を開催出来ましたことは個別に、調査・収集に携り、あるいは、御協力頂きました方々の努力の賜ものとここに厚くお礼申しあげます。

ここにまとめた文化財年報は、昭和51年、52年度に実施した各調査の概略であります。今後の文化財保護の指針として活用いただければ幸いに存じます。

なお、この文化財年報の刊行にあたり、御協力を頂いた方々に厚くお礼申しあげます。

昭和53年3月

高槻市教育委員会

社会教育課長 橋長 勉

目 次

I 文化財の調査	1
1. 美術工芸	1
2. 塹造物	1
3. 石造物	2
4. 民俗文化財	3
5. 埋蔵文化財	3
II 高槻市文化財一覧	23

図 版

PL 1	美術工芸
PL 2	埴造物・石造物
PL 3	石造物
PL 4	石造物
PL 5	石造物
PL 6	石造物
PL 7	民俗文化財
PL 8	埋蔵文化財調査位置図
PL 9	埋蔵文化財調査位置図
PL 10	埋蔵文化財調査位置図
PL 11	埋蔵文化財調査位置図
PL 12	安満遺跡
PL 13	安満遺跡
PL 14	安満遺跡
PL 15	安満遺跡
PL 16	島上郡衙跡
PL 17	島上郡衙跡
PL 18	島上郡衙跡
PL 19	島上郡衙跡
PL 20	島上郡衙跡
PL 21	島上郡衙跡
PL 22	島上郡衙跡
PL 23	島上郡衙跡
PL 24	富田遺跡
PL 25	富田遺跡・芥川城
PL 26	富田遺跡
PL 27	安満遺跡
PL 28	坂脇古墳群
PL 29	坂脇古墳群
PL 30	二子山古墳
PL 31	二子山古墳
PL 32	島上郡衙跡
PL 33	島上郡衙跡
PL 34	島上郡衙跡
PL 35	島上郡衙跡
PL 36	梶原寺跡
PL 37	梶原寺跡
PL 38	梶原寺跡
PL 39	梶原寺跡
PL 40	宮田遺跡

I 文化財の調査

1 美術工芸

重要文化財 木造千手観音坐像修理

昭和 49 年 6 月 8 日付で重要文化財に指定された。この仏像は最も一般的な形である四十二臂の千手観音坐像であり、十世紀後半の典型的なものを示す像である。仏頭を除く頭上面のすべてや脇手の大部分が当初のものである。平安時代前期のこの地域を代表する傑作である。

しかし、この像は破損がひどいため、昭和 51 年度、52 年度の 2 カ年計画で仏像修理を行なった。

〔破損状況及び修理内容〕

- 全体に虫歟。朽損し欠失が多く、各頭目は離れ、脇手の接合部等の腐蝕が甚しく、手前から脱落及び欠失する。
- 天冠台周辺の虫歟がひどく頭目により部分が朽損欠失している。
- 後補の手は形状が不適合であったため、これらの修正で行なった。欠失及び形状不適合の手を含めると左手 14 個、右手 12 個の修理が必要である。
- 頭目が離れる箇所や脱落する脇手等は板付けされているが、脇手の配列が形状不適合であり、持物は後補で右 6、左 4 を残すのみで他は欠失していた。
- 佛座部の朽損が甚しく、右脚頭の地付部が大きくなってしまった。
- 光背、台座は亡失し、近時の修理の着色が見苦しく変色する部分があった。

〔修理仕様〕

- 蛍虫を施し、頭目を複数箇所に察体し漆で接合緊結した。
- 虫歟・朽損部は樹脂及び漆で硬化補修した。
- 後補材のうち見苦しい個所及び修正を行い、氣泡や陥没による欠失部等は板材で補修した。
- 脇手は形を整理して取付け後補の手は修理を行い、欠失部は板材で補修した。
- 佛座は不適合につき修正を行い、各欠失部のうち損傷移行の恐れのある部分のみ板材で新補した。
- 後補の変色部は色の修正を行い、修理箇所はすべて古色仕上げとした。

重要文化財 木造千手観音坐像

昭和 51 年度よりの継続事業として、欠失している台座の新補を行なった。

台座は檜材、墨漆塗り古色仕上げの宣字座で、台座の裏

に修理記録の銅札を貼りつけた。

2 建造物

普門寺方丈（重要文化財）

富田町 4 丁目に所在する普門寺の方丈が大阪府教育委員会の有形文化財建造物として指定されていたが、昭和 52 年 1 月 28 日付文部省告示第 2 号により国の重要文化財に指定された。

〔指定説明〕

普門寺は慈雲山と号する臨済宗寺院で応永 11 年以前に設置和尚によって創立された。

はじめ、翻訳派に属し、南寧寺金地院の下にあったが、享禄・天文頃に慈安寺の末寺となり、現在に至っている。方丈には棟札（注 1）があって、弘光 7 年に建立したものと正保 2 年になって寛永宗清が移したと伝えている。

格子七間、梁間五間半、入母屋造で屋根は棟瓦を葺いているが、もとはこけらか桧皮葺であらう（注 2）。南向きて、東側面に庫裏が接続し玄関はない。方柱、舟肘木、一軒破風木本舞裏で、平面を格子中央部三間半を室中寄り二間を下間、西寄り一間半を上間に分けるが梁間は南側一間を広縁、つぎ二間半を前室、北寄り二間を奥室としている。

上間奥室は東西に床と押入、北面に付書院を設けるが、押入と付書院は後に設けられたもので、もとは下間奥室の北面に付書院があつた。空中奥室を復元すると、南側一間通りが仏間で、三間半通しの仏壇がつき、後ろ側一間は小御堂や物置になる。天井は各室とも独立天井で、室中には蟻膜を入れる。

柱間強度は広縁両脇が杉戸、正面中央が双折戸唐戸内明障子、背面の一部が土壁であるほかは無良戸（南面）引違内明障子となる。正面側には桃唐戸、無良戸、明障子とともに古いものが残されている。内部間仕切は仏間の背面側が板壁となるほかは襖引違いで（注 3）、柱には迎げが付く。内法上は空中の前室奥空境の中央部のみ後間開、ほかは土壁としているが、もとは室中と上間、下間にも後間開を入れていたらしい。

この方丈は木割が細くて建ちが低く、相当古風であり、上間と下間の開口が異なるなど変わったところもある。京都に多い柳家方丈が地方へ伝わる過程の一遺構として重要なである。

注 1 〔棟札〕（附指定）

（表）攝州島上郡慈雲山普門寺方丈上梁、先是元和第七辛酉春二月當建延、大工河内守藤原政康、今至正保第二乙酉冬八月移基於此地尋一新居庫等之欽字、伏

塔籠・鳥居年代別一覧表

年号	西暦	奈良	鳥居	年号	西暦	奈良	鳥居
元和	1615～1624	1	宝暦	1751～1764	18		
寛永	1624～1644	1	明和	1764～1772	19		
正保	1644～1645	1	安永	1772～1781	17	1	
明暦	1655～1658	4	天明	1781～1789	2		
万治	1658～1661	4	寛政	1789～1801	6	4	
寛文	1661～1673	7	享和	1801～1804	4		
延宝	1673～1681	10	文化	1804～1818	12	1	
天和	1681～1684	3	文政	1818～1830	15	2	
貞享	1684～1688	2	天保	1830～1844	15		
元禄	1688～1704	15	弘化	1844～1848	8		
宝永	1704～1711	16	嘉永	1848～1854	7		
正徳	1711～1716	3	安政	1854～1860	4		
享保	1716～1736	21	万延	1860～1861	4		
元文	1736～1741	2	慶応	1865～1868	4		
寛保	1741～1744	2					
延享	1744～1748	9	1				
寛延	1748～1751	3	計			282	24

臺慶安(1648～1652)・承応(1652～1655)・文久(1861～1864)・元治(1864～1865)年間について現在のところ該当するものはない。

名 称 本山寺石造宝篋印塔

所 在 地 高槻市大字原 3 2 9 8番地

所 有 者 本山寺

管 理 者 百濟被詔

概 要

本山寺は役小角の草創と伝える天台宗の寺院である。宝篋印塔は本堂後方の丘腹尾根上にある経塚に建つ。この経塚は法華經を埋納していると伝えられる。

塔は総高 1.91m の花崗岩製の全階式宝篋印塔で、各部とも完存し、周囲に野面石積みとした方形の土壇上に建っている。造立年代は刻銘を有しないため明らかでないが、様式手法からみて鎌倉時代後期のものと考えられる。

基礎は上角を階段状に作り、塔身には東面に外陀、南面に不空成就、西面に阿彌、北面に宝生の釋迦を葉筋彫りにしている。笠石は葉筋彫りの突起を軒先と同一面に垂宮に立て、内側の曲筋は一つの弧からなり、笠石と隅脚彫りの丸目には界線を刻む。軒輪は九輪を模倣してらわし、伏鉢及び九輪上の諸花には単弁の八葉蓮弁を刻んでいる。

この塔は全体の形がよく整った古式のもので、鎌倉時代後期の保存のよい宝篋印塔として貴重である。

感大法網隆五緑成始以降下水劫日賀賀頃頃白、古米客座物候誰度人齊多只把少林無孔笛大鼓鳴起大平歌、杖、大工同島甚右衛門尉清次、奉行楳瀬首座等、住山義京宗御詔焉、櫻越徳松院妙雲心月人師（裏）文字なし

注 2 芽負上端に軒付に相当する一本の材を置いている。棟瓦については、鷹子口に嘉永五年（1852）のへら書があるので、この時に葺き変えられたものであろうか。

注 3 梁は現在すべて新しい鳥の子を張っているが、狩野安信（永真安信）の墨画のある横樋が別途保存されている。

3 石造物

調査目的

石造物には、石燈籠をはじめ、宝塔・宝篋印塔・五輪塔・石仏・手水鉢・石鳥居・狛犬・石欄・石碑など数項目があげられる。

今朝は主に神社にある石鳥居・石燈籠・狛犬さらに道標などの数、造立年代等の基本的な台帳整備を作成する目的で、昭和 52 年 7 月から始め現在調査中である。

市内にある 50ヶ所の神社のうち 36ヶ所を調査した結果、約 400 基にも及ぶ石造物が確認された。そのほとんどが石燈籠や鳥居である。年代の確認できるもののうち大部分は 1600 年代から 1800 年代（江戸時代）に造られたものである。中でも古いのは安満の鈴手社神社の鳥居で 1622 年（元和 8 年）の建立であった。また、燈籠では同じ鈴手社神社で 1646 年（正保 8 年）の建立である。

石燈籠や狛犬は鳥居などと同じくいわば莊嚴のためのものであるが、刻み込まれた文字から奉獻・報恩・諸願成就などの目的から造立されたものと考えられる。

調査ヶ所 37ヶ所

調査概要 鳥居 32基（うち年不詳 8）

手水鉢 18基（うち “ 2 ）

狛犬 21 对

燈籠 283基（うち対のもの 100、年代の判読できるもの 282 基、別表参照）

道標 14基

4 民俗文化財

民俗文化財収集の目的

1. 民俗文化財は、社会生活や生産様式等の変移に伴い、消滅あるいは、その姿を変えつつある。それ故に、早急にこれらの保護を徹底し、その活用を図り、文化の向上に資していかなければならない。

消滅・変化は本市においても例外ではない。そこで、昭和51年に高槻市民俗文化財収集要項を作成し、51年12月よりこれに基づき調査・収集を開始し、現在収集整理できているものは(表)のとおりである。

分類	点数	主なもの
1. 貨具	62	右白・馬糞等
2. 機器・農業具	32	高機・きぬた等
3. 渔具	16	漁火・うなぎかき等
4. 家具	78	箱火鉢・燐台等
5. 衣服・装身具	49	みの・帯・こうぐ等
6. 文用具	11	棹秤・箱算盤等
7. 運搬具	2	川舟
8. 社会生活用具	4	力持石・竈吐水等
9. 信仰用具	2	のぼり
10. 人の一生の用具	3	嫁入かご・打ち掛け
計	259	

<注> * 収集は、寄贈を原則としている。

* 寄贈者は24名である。

2. 昭和52年度高槻市文化祭事業の一環として、収集整理できたものを、市民会館G階において展示した。

期間 昭和52年11月5日～18日

展示数 約200点

5 埋蔵文化財

1. 安満遺跡

所在地 高槻市高塙町216

調査面積 1,600m²

調査期間 昭和51年11月15日～12月16日

調査経過

当該地は昭和43年に大阪府教育委員会によって調査された高塙町の住宅地の南西側に接する水田である。この村近では弥生時代後期の堅穴式住居址が検出されている他は不明確な部分が多い。今回、分譲住宅の建設に先立って発掘調査を実施した。

遺構

層序は耕土(0.1m)・床土(0.05m)・黄灰色土

(0.2～0.3m)・暗褐色土(0.2～0.5m)で、地山は黄褐色の砂質気味の粘土である。調査地区的東側半分は青灰色の砂礫が入り混じる。遺物はまったく検出されなかった。西側部分では古墳時代の土塙墓6基と溝状遺構・井戸を検出した。

土塙墓は2基ずつ3か所で検出した。1号土塙墓は直径約1mの円形を呈し、深さ0.1mを測る。2号土塙墓は長さ1.8m・幅0.8m・深さ0.1mの長方形。3号土塙墓は長さ1.6m・幅1.2m・深さ0.2mの隅丸方形。4号土塙墓は長さ2m・幅1.3m・深さ0.1mの隅丸方形を呈する。5・6号土塙墓は直径約1mの円形を呈し、深さ0.1～0.25mを測る。いずれも内部から土器の破片が認められた。

井戸は調査地区北側で検出した。掘り方は二段張りで、上層は径2.6m・底部では径0.7mを測り、深さ1.9mの円形素掘りである。

他に、幅1～2m・深さ0.1m程の溝と5・6号土塙墓の東側に南北11m・東西5～6m・深さ0.5mの落込みを検出したがその性格はいずれも不明である。

遺物

土器器、須恵器が暗褐色土層から、井戸内からは庄内式土器が出土している。また、柱状石斧2点と砥石1点が出土している。

所見

古墳時代の墓地としての可能性を示しており、北側の住宅地には古墳時代の集落が埋設しているものと考えられる。

(稿本)

2. 安満遺跡

所在地 高槻市高塙町17

調査面積 1,414m²

調査期間 昭和51年11月29日～12月22日

調査経過

当該地はさきに調査を実施しているところの南側にあたり、木材置場の建設が予定されたため、免振調査を実施した。

遺構

北側の調査地区より現地表面が約5.0m程度くなっているが、基本的な層序に変化はなく土層の色調が少し変っている程度である。耕土(0.1m)・床土(0.1m)・灰色砂質粘土(0.3m)・褐色土(0.5m)と地層し、地山は黄灰色の砂質気味の粘土である。地山面に溝および方形周

周溝群を認めた。

溝は調査地区西部において検出した。幅1m・深さ0.1m程度で、東西および南北方向に走る溝があり東西方向のものは約1.8mの間隔をかいて平行で、南北方向のものはこれと直交するようである。時期は弥生時代と考えられる。

方形周溝墓は3基を検出したが、いずれも溝を接している。幅1.2~2m・深さ0.4mを測る周溝で囲まれた1号

方形周溝墓は、検出し得た周溝墓中最大規模で、周溝内縁に長辺8m・短辺7mを測る。なお、東側の周溝内から板状の木製品が出土している。2号方形周溝墓は1号方形周溝墓の南側周溝と共有するもので、幅1m・深さ0.5mの周溝で西側少く区画されている。東側は別の周溝によって埋されていたため明確ではないが長辺4m・短辺3m程度である。3号方形周溝墓は幅0.4m・深さ0.2mの周溝に囲まれ長辺約4mを測り、周溝は充挖せずに西側でL字状になっている。2・3号方形周溝墓は1号方形周溝墓の南に連続し、方向も同一である。4号方形周溝墓は1号方形周溝墓の東側の周溝を共有して接するもので、西北隅部しか認められなかつたが、1号方形周溝墓と同一方向と考えられる。北側の周溝は幅1.4m・深さ約0.3mを測る。1・2・3・4号方形周溝墓の主体部は認められなかつた。5号方形周溝墓は4号方形周溝墓の北側周溝に接するもので1~4号方形周溝墓と方向を異にしている。周溝は幅0.5m・深さ0.2mで、周溝内縁は長辺4.8m・短辺4mを測る。中央部に主体部として木棺と土坑が検出された。木棺は長さ1.45m・幅約0.6mの長方形墓室の底部に暗灰色粘土を1.8cmの厚さに敷き、その上に埋設し、蓋板まで灰色粘土で覆っていた。蓋板は長さ1.14m・幅3.0cm・厚さ3cmを測る。側板は東側のみ埋存し、高さ14cm・下部で厚さ4cm・長さ11cmを測る。木口板はかなり腐歛していたが原位置をとどめていた。いずれも蓋板の端から1~2cm内側にかけ、木口板間は104cmを測る。蓋板はかなり腐歛しているが、長さ100cm・幅27cm・厚さ2.6cmを測る。なお、木口板を固定するための穴は底板・側板とともに認められなかつた。また、木棺内部には遺物はなかつた。木棺に隣接する土坑墓は長さ1.7m・幅1m・深さ約0.1mを測り、隅丸方形を呈している。遺物や木棺の痕跡はまったく認められなかつた。

遺 物

調査地区西部の溝内から弥生式土器が出土している程度で遺物の量は少ない。1号方形周溝墓の周溝内から第I様式の破片が1点出土しているが、時期決定としては不適当と考えられる。

所 見

今回、検出した方形周溝群の時期は出土遺物が少ないので明確さを欠くが、一応中期と考えてよいだろう。なお、今回の調査区を含めて、臉延川に近いところでは、8ヶ所の弥生時代墓地群が明らかとなつた。(橋本)

3. 安積遺跡

所 在 地 高槻市八丁堀町1-2-1

調 査 面 積 287.5 m²

調 査 期 間 昭和52年1月17日~2月3日

調 查 経 過

京大農場の周辺部分については最近の調査によって実態が徐々に解明されているが、京大農場内は昭和3年の道路免許時に事務所南側と、昭和45年に外周部分の範囲確認調査を行ったにすぎない。今回、農場の灌水設備に伴う配管地帯設工事が計画されたため、立合い調査を実施した。

遺 墓

工事は幅30~50cm・深さ約90cmを掘さくして配管するもので、農場東部の果樹園・事務所北側・および事務所西側の倉庫付近が掘さくされ、地区名では24・25・26区をまたがる細長いトレンチを設定したことになつた。

掘さくが深さ約90cmで止まるため、遺構検出面でもには至らなかつたが、部分的に遺構を検出することができた。事務所北側では盛土(0.2m)・床土(0.1m)・暗褐色土(0.3m)・暗褐色粘土(0.4m)と堆積、地山は黄褐色土上である。この部分では暗褐色粘土がレンズ状に堆積し溝状遺構となつているのをはじめ程0.5m程の円形ビットがみられた。

果樹園でも暗褐色土は堆積しているが、東方および北方では薄くなっている。また、南にむけて地山が下降し、堆積が多くなるよう遺物・遺構はほとんどみられない。

遺 物

事務所北側で弥生式土器が出土している。ほとんどが弥生時代中期のものであるが、前略ものも散点みられる。

所 見

從来の見解どおり、農場事務所付近が遺跡の中心部と推定される。出土した土器には第IV様式期のものかなりみられ、昭和42年に調査した方形周溝墓との関連が想定される。

東方の果樹園付近では遺構が希薄で昭和45年の木棺墓検査などと考え合わせると、この地区は弥生時代の墓地ではなかろうか。(橋本)

4. 安満遺跡

所在地 高槻市安満新町 379-1

調査面積 740m²

調査期間 昭和52年2月22日～3月9日

調査経過

当該地は羽林後車区の北側で、すぐ北を四国街道が走っている。付近に分譲住宅の建設が多く、昭和48年の東側地区の調査では弥生時代中期（第IV様式）の溝をはじめ、萬葉時代後期の土器が多数出土している。今回、分譲住宅の建設が計画されたため調査を実施した。

遺構

溝（0.2m）・土塁（0.05m）を除去すると黄灰色砂質粘土（地山）となる。土塁基・壺棺墓および構を検出した。

土塁基はいずれも調査地区北側に位置している。1号土塁基は長さ1.8m・幅0.4m・深さ0.1mを測り、底盤長方形を呈しており弥生時代中期の土器が出土している。2号土塁基は半月状を呈しており、長さ1.65m・幅0.45m・深さ0.25mを測る。壺棺墓は土塁基の北側に位置し、底盤約0.8m・深さ0.8mの円形の墓室内に弥生時代中期の壺が横倒しになって焼付された。

溝は幅2m・深さ0.5mで調査地区の西北方向から東南方向にむかって掘さくされたもので、溝内からは弥生時代中期の土器が多数出土している。

遺物

溝内・土塁基・壺棺墓の遺物はいずれも弥生時代中期（第IV様式）のものである。特に、壺棺墓は西の辻N地点出土の壺の特徴を有するものである。

所見

今回検出された溝は方向や遺物からみて、東側の調査地区で検出された溝と連結するものと考えられ。弥生時代中期には検査車以東側を数10mにわたって溝が掘られていることが明らかとなった。この溝が占める位置は不明であるが、今回の調査地区より北では遺構・遺物がほとんど検出されないとところから、あるいは安満遺跡の北限を示すものであるかもしれない。（概本）

5. 嘴上郡衙跡

所在地 高槻市清福寺町 285-1, 846-2

調査面積 199.79m²

調査期間 昭和51年6月7日～6月23日

調査経過

当該地は史跡嘴上郡衙跡の東北方にあたり、清福寺町の公民館が焼却したため、改築することになった。このた

め、免振調査を実施した。

遺構

層序は底土（0.8m）・耕土（0.8～0.4m）・暗褐色土（0.4m）・青灰色砂礫層となる。暗褐色土層には布留式土器や須恵器、瓦器などが包含されているため、この柱穴は鍛冶時代以後のものと考えられる。暗褐色土層を除去し、青灰色砂礫層の上面で遺構を検査したが遺構らしきものは検出されなかった。

遺物

土器・須恵器・瓦器・近世陶器・瓦が出土している。

所見

調査範囲が狭小で遺構の拡がりについては明確さを欠く。当調査区の東北でも中世の遺構が検出されているため、郡衙東北部に中世の集落が営まれたことを裏づけている。

（概本）

6. 嘴上郡衙跡（66-D・H地区）

所在地 高槻市川西町1丁目1020-1・2

調査面積 2161.45m²

調査期間 昭和51年6月12日～7月16日

調査経過

当該地は市道辻子・下ノ口線と西国街道が交差する地点から東約50mのところで、北側は四国街道（旧山陽道）に接続している。

今回、分譲住宅の建設が予定されたため、免振調査を実施した。

遺構

層序は底土（約1m）・耕土（0.2m）で包含層はなく、すぐ黄褐色粘土（地山）となる。

調査区の中央部西側で幅0.3～0.5mの柱穴3個と、幅1m、長さ2m、深さ0.2mの土塁1基を検出した他、南北隅と南西隅で落ち込みの一部を検出した。埋め土はすべて黒色粘土で弥生式土器を少數包含していた。

遺物

柱穴・土塁・落ち込みからは、弥生時代後期の壺・高杯・壺の小破片が若干出土した。その他、中央部の粘土取り跡からは、5世紀中頃の須恵器蓋・片片が数点と中世陶器片が1点ある。

所見

西国街道より南側の遺構のあり方は、すぐ東側の67-A地区において、弥生時代末期の円形プランの堅穴住居跡と奈良時代の2間×3間の掘立柱建物跡が知られているが、一様に遺構の拡がりが希薄な地区であると考えられる。

(大船)

7. 島上郡跡

所 在 地 高槻市清福寺町 886-2

調査面積 870 m²

調査期間 昭和 51 年 7 月 9 日～9 月 3 日

調査 経過

当該地は式内社阿久刀神社の南側に接した水田である。

分譲住宅の建設が計画されたため発掘調査を実施した。

遺 構

層序は耕土(0.1 m)・床土(0.2 m)・灰褐色土(0.1 m)・暗褐色土(0.3 m)、砂礫混入の黄褐色土となる。遺構は黄褐色土層上面で検出される。層位的には区別できないが、弥生・古墳・奈良・平安時代の遺構に分かれる。平安時代の遺構としては掘立柱建物跡 5 棟である。

掘立柱建物 H1 は 2 間(柱間 1.8 m) × 2 間(柱間 1.8 m) の正方形の建物で方向は N-23°-E である。掘立柱建物 H2 は 1 間(柱間 2.0 m) × 3 間(柱間 1.25 m) の南北に長い建物で、方向は N-10°-E である。

掘立柱建物 H3 は 2 間(柱間 1.6 m) × 2 間(柱間 1.9 m) の少し南北に長い建物で、方向は N-17°-E である。掘立柱建物 H4 は 2 間(柱間 1.84 m) × 2 間(柱間 1.84 m) の東西に長い建物である。方向は N-14°-E である。掘立柱建物 H5 は 2 間(柱間 1.84 m) × 2 間(柱間 2.12 m) の少し南北に長い建物で方向は N-12°-E である。

奈良時代の遺構としては 9 基の土塁墓と 1 棟の掘立柱建物跡を検出した。

土塁墓の多くは不整形で、方向性にまとまりがなく、グループごとにまとめることが不可能である。

掘立柱建物 H6 は 2 間(柱間 1.68 m) × 3 間(柱間 1.52 m) の東西に長い建物である。方向は N-3°-E である。

古墳時代の遺構としては、周辺で検出されたものと同様方形を呈する堅穴式住居跡 2 棟を検出した。

堅穴式住居跡 K1 は長辺 5.3 m・短边 5.1 m を測り、床面は均等平坦で、布留式の床・高杯が出土している。

堅穴式住居跡 K2 は K1 の北隣に位置し、一辺 4.5 m の方形を呈する。

弥生時代の遺構としては方形周溝墓 2 基と寄草墓 1 基を検出した。

4 号方形周溝墓は、幅 1.8 m・深さ約 0.5 m の周溝に囲まれたもので周溝内縁は東西約 7 m、南北 7 m 以上である。東北部に幅約 2 m の陸樋部がある。馬溝内側には 6 基の土

塗基が検出された。時期は弥生時代中期(第Ⅲ様式)である。

寄草墓は、4 号方形周溝墓が埋没した段階で設けられたもので東側周溝外縁で検出した。直径 0.7 m・深さ 0.15 m を測る円形の振り方内に口縁を打ち欠いた土を横倒しにして、整間に別の壺の底部をかぶせたものである。時期は後期(第V様式)である。

遺 物

暗褐色土層から土器器・須恵器・弥生式土器が、また堅穴式住居から布留式土器が出土した。

所 見

奈良時代の土塁墓はこれまでほとんど検出されておらず、奈良時代の墓地を知る上で重要な要素である。また、方形周溝墓は一基だけではなく調査地区外にも連なっているようであり、堅穴式住居跡とあわせて都衙成立以前の様子を知るうえで重要な要素である。(橋本)

8. 島上郡衙跡

所 在 地 高槻市清福寺町 894-1

調査面積 717 m²

調査期間 昭和 51 年 7 月 6 日～8 月 12 日

調査 経過

当該地は史跡「島上郡衙」の北に位置し、現状は水田である。今回、個人住宅建設に先立って、発掘調査を実施した。

遺 構

まず調査区全般を重機で振り下げ、遺物の検出につとめるとともに、遺構面を追求した。その結果、遺構面は 1 面のみで、全ての遺構が山面にまとめられた。層序は、耕土(0.15 m)、床土(一部分)、整地層(0.2 m)、灰褐色砂質土層(0.25 m)、茶褐色土層(遺物包含層)(0.3 m)で、以下地山になる。遺構としては弥生時代中期(畿内第 IV 様式)の方形周溝墓 2 基、奈良時代の掘立柱建物跡 3 棟、平安時代の掘立柱建物跡 1 棟の他、配石土壙・築石遺構・土器等がある。周溝墓は調査区の北西部に認められ、いずれもその 1 基が調査区域外にあるため、その全形は明らかでないが、1 号および 2 号は 1 辺 8 m、3 号は 1 辺 5.7 m を測る。

住居跡は、1 辺 5 m 弱の方形を呈し、四柱穴構造をもつもので、壁は認められない。

掘立柱建物跡の内、奈良時代の柱穴は、振り方 1 辺 0.8 ~ 1.2 m でほぼ方形を呈しているに対し、平安時代のものは小さく不整形である。

遺物

弥生時代の遺物は、中期～後期にかけての壺・甕・鉢・高杯などで、その遺存状態は全体に悪い。古墳時代の遺物は、須恵器（器台・高杯）片が若干出土している。奈良時代の遺物は、土器器・須恵器片が出土しているが、まとまとたものはない。平安時代の遺物は、黒色土器、燈明皿、瓦類があげられる。

所見

弥生時代の集落は、これまで 38 - K 地区および 74 - B 地区から検出された方形周溝基盤の存在によって、少なくとも中期には、2つの集落のあることが考えられていた。そして今回の調査によって、もう1単位中期の集落の存在をみとめることとなった。また、奈良時代の建物跡を検出したことは、都構造遺構の北地域への拡がりを考える上で貴重な資料であろう。（森田）

9. 岐上郡西跡

所在地 高槻市川西町 1 丁目 9 7 2 - 1

調査面積 104.38m²

調査期間 昭和 51 年 8 月 19 日～21 日

調査経過

当該地は史跡「岐上郡西跡」の南にあたり、現内国街道に北接している。今回個人住宅改築に先立って、調査を実施した。

遺構

層序は盛土（0.6 m）、耕土（0.1 m）、灰土（一部分）・淡茶灰色土層（整地層 0.25 m）、暗褐色土層（遺物包含層）（0.3 m）、以下地山となる。弥生～古墳時代にかけての遺物包含層を確認した。また調査区の南端から、平安時代のものと考えられる流路を検出した。その他の遺構は認められなかった。

遺物

二重円錐形を有する壺の一部と受口状口縁を有する壺の一部が出土した。また施路と考えられるところから、須恵器片および曲げ物の底板と思われるものが出土している。

所見

今回の調査では、都構に隣接する遺構はみとめられなかった。しかしながら弥生時代末の遺物包含層を検出したことは、67-A・B 区で検出している住居跡と考え合わせたとき、この周辺に集落のあったことが推測できる。（森田）

10. 岐上郡西跡

所在地 高槻市川西町 1 丁目 1 0 0 5 - 1

調査面積 45 m²

調査期間 昭和 51 年 9 月 13 日～16 日

調査経過

当該地は史跡「岐上郡西跡」の南にあたり工場の水槽設置工事に先立って発掘調査を実施した。

遺構

層序は盛土下に暗褐色土（0.7 m）、褐色土（0.2～0.3 m）、黃灰色砂質土と堆積している。地山は黃灰色砂質土であるが、どの層からも遺構・遺物は検出されなかつた。

所見

都府の付近と推定される地区であるが、遺構・遺物がまったく検出されず、都府の拡がりを考えるうえで重要な（権本）。

11. 岐上郡西跡

所在地 高槻市清福寺町 9 0 3 - 1

調査面積 70.07m²

調査期間 昭和 51 年 9 月 21 日～24 日

調査経過

当該地は史跡「岐上郡西跡」の北に隣接している。今回、分譲住宅の建設とともに水路及び道路が施工されることになったため調査を実施した。

遺構

層序は耕土（0.8 m）、灰土（0.1 m）、暗褐色土（0.8 m）で地山は砂礫の混入する黄褐色土である。南北半分は水路のために破壊されており、幅 0.8 m 程度しか調査できず、数箇所の柱穴を検出したにとどまった。

遺物

弥生式土器・須恵器が出土した。

所見

調査区が狭小ため、明確な遺構を検出することはできなかつた。（権本）

12. 岐上郡西跡

所在地 高槻市清福寺町 7 8 9 - 1, 7 9 0 - 2

調査面積 20.5m²

調査期間 昭和 51 年 10 月 4 日～11 月 5 日

調査経過

当該地は、史跡「岐上郡西跡」の東北方にあたり、これまでの調査では、古墳時代の集落跡や平安時代の遺構を確認している。今回、分譲住宅建設に先立って、発掘調査を実施した。

遺構

層序は耕土(0.15m), 床土(0.15m), 反覆色土層(0.15~0.25m), 咳茶褐色土層(0.2~0.8m), 咳褐色土層(0.1~0.2m)で、地山になる。

弥生時代の遺構は、構と井戸が認められた。構は、調査区東辺を堀へ4度ふれて南流している。構内の層序は、上方から暗灰褐色土層(第Ⅱ様式~第Ⅴ様式), 茶褐色土層(第Ⅱ様式), 青灰色粘質土層(第Ⅲ様式)とつづいて、溝底に至る。上端での溝幅は不明だが、溝底中心部から折り返して推定すると3m前後となり、溝底幅は0.7~0.8m前後を測る。また溝底の傾斜角度は緩く、ほとんど雨水していたものと思われる。事実、最下層の青灰色土層は、砂粒を含まない粘土質であった。このことは、この構が推さくされた性格を示すものであろう。井戸は、調査区南寄りで検出された。ほぼ円形を呈し、上端で径1.75m, 底部で0.6m, 深さ1.1mを測る。層位的には3層に分かれ、中から破壊された大量の土器(第Ⅴ様式後半)が出た。一方、弥生~古墳時代にかけての住居址を1基検出した。南北5.4m, 東西4.1m以上を測り、縦で替えが認められる。住居址の中央には焼土を内包したPitがある。上層からは、布留式土器、下層からは、タタキ目を有する土器片が出土している。この住居址の正確な時期については明らかでない。その他、奈良時代の土器群や土塁等が認められた。

遺 物

縄文式土器(船模式), 弥生式土器(第Ⅱ様式の壺・甌・鉢, 第Ⅴ様式の壺・甌・鉢・高杯), 布留式土器(壺・甌・鉢・高杯・器台), 土器部(壺・壠・皿)等が出土している。

所 見

今回の調査で、奈良時代の遺構跡は認められなかつた。しかし土器群や土塁等が検出したこととは、当該地が史跡「鳴上郡衙跡」の外延地域にあたるところから、その茲がりを考えるに充分なものと思われる。さらに、第Ⅱ様式の溝を検出したことは、鳴上郡衙跡の作成を考えるうえで興味深い。(森田)

13. 鳴上郡衙跡

所在 地 高槻市郡家新町242, 243-3

調査面積 672m²

調査期間 昭和51年10月6日~11月6日

調査経過

当該地は神野社の南約350mで小字名は高津である。西約20mの水田において、昭和45年に大阪府教育委員会が行なった範囲確認調査では旧山陽道跡とみられる石敷

や溝を検出している。下水道清掃会社の事務所兼倉庫が改築されることになったため発掘調査を実施した。

遺 墓

事務所兼倉庫の基礎によって、遺構がかなり破壊されていたが、山陽道跡とみられる石敷や側溝を検出した。

山陽道跡はこぶし大の石とつきかためられた幅約5mの茶褐色粘土があり、この粘土面は南北に傾斜していて、西方の確認調査で確かめられた北側の石敷の延長とみられる。

この粘土面は調査地区西側では厚く、東側では薄くなり、石もみられなくなる。この道路敷とみられる石とつきかためられた粘土面の北側には幅1m・深さ0.1mの浅い溝が検出され、道路敷の北側を面しているものと考えられる。この道路幅は南側を新しい時期の溝によってある程度削られているが、本来5~6mと考えられる。

道路敷とみられる粘土層から南へ約1.5mの間隔をおいて幅2~3m・深さ0.5mの溝が検出された。この溝は北の道路敷と同一方向で、内部から土器部・須恵器の危に上昇部から瓦器片が出土しており奈良時代から平安時代にかけて流れていいたらしい。この溝の北側には小石をつきかためたような様子はなかったか。四方の確認調査の様子や地表面に黒色土器や土器部破片がみられることから、この部分も道路敷であったとみられる。

今回の調査では北側の石敷と南側の前後関係を明確にすることはできなかつたが、当初南側に幅1m前後の道路敷があり、のちに北側に幅5~6m程度の道路敷がつくかえられたとみられる。

なお、いずれも標高14.8m前後を測り、道路敷下には古墳時代の遺物包含層がみられる。

所 見

今回の調査では山陽道の実態を明らかにする資料を得るとともに、山陽道の側溝が平安時代末に埋没していることがわかった。このことは、郡衙が平安時代以後その機能を失うこととあわせて、律令体制のあり方にも問題をなげかけるものである。(橋本)

14. 鳴上郡衙跡(6-8-C-G地区)

所在 地 高槻市川西町1019

調査面積 985m²

調査期間 昭和51年10月15日~10月23日

調査経過

当該地は市道下士・下ノ口堀と西田街道が交差する地点から東約30mのところ、北側は西田街道(旧山陽道)に面している。ここに個人住宅の建設が予定されたため、発掘調査を実施した。

遺構

層序は耕土（0.15 m）で、すぐに黄褐色粘土（地山）になる。調査区からは遺構・遺物は検出することができなかつた。

所見

東側の調査区と合せて、西国街道の南側では、後世の擾乱によるものか遺構は少い地域であることが確認できた。（大船）

15. 鳴上郡街跡（38-4-N地区）

所在地 高槻市川西町1丁目9-9-2

調査面積 350.9m²

調査期間 昭和51年11月1日～11月25日

調査経過

当該地は市立川西小学校の東側にあたり、個人住宅の建設に先立って免震調査を実施した。

遺構

層序は盛土（1.5 m）、耕土（0.2 m）、末土（0.25 m）、暗褐色土層（0.35 m）、茶褐色土（地山）である。

検出した遺構は、弥生時代後期の方形周溝墓・土塙墓・覆窓と古墳時代の落ち込み・柱穴である。

南側中央部で検出した1号方形周溝墓は、大部分が調査地区外にあり明らかでない。周溝の幅は約1～2 mで深さは0.25 mと浅く。西側で陣籠となり一巡しない。土体部は明らかでない。

2号方形周溝墓は、東半分のみを検出した。その規模は、東辺約3.5 mで周溝の幅約1.5 m・深さ約0.2 mを測り、北側で陣籠となり一巡しない。土体部は不明であるが、周溝に接して土塙墓を2基検出した。

土塙墓は、これらの方形周溝墓の周囲に大小あわせて10基を検出した。その中で幅約1.1 m・深さ0.5 mの上塙墓には、横に寝かせた大きな複窓が埋設されていた。竪棺は複径4.2 cm・高さ5.8 cmを測り、口縁部を打ち欠き、底部に穿孔していた。

北東部で検出した古墳時代の落ち込みは、深さ0.8 mの南北に長い溝状のものである。柱穴は、幅約0.2 m・深さ約0.1～0.15 mを測る小さなものが十数個認められた。

遺物

暗褐色土層からは弥生時代中期から6世紀末までの遺物が若干出土した他、方形周溝墓の周溝からは弥生時代後期の土器片が少量出土した。古墳時代の落ち込みと柱穴からは、5世紀末頃の須恵器・土師器片が小量出土している。

所見

この周辺一帯は、弥生時代中期～後期に至る一大墓地群

の存在が明らかとなった。その後5世紀以後に居住地として開発されたことがうかがえる資料であろう。（人船）

16. 鳴上郡西跡

所在地 高槻市鳴福寺町8-8-7番地

調査面積 64.1m²

調査期間 昭和51年11月17日～12月20日

調査経過

当該地は、史跡「鳴上郡街跡」の北に位置し、周辺での調査結果から、弥生時代～平安時代にかけての遺構の存在が考えられるところである。今回、分譲住宅建設に先立って、免震調査を実施した。

遺構

層序は、耕土（0.1 m）、灰褐色砂質土層（0.2 m）、茶褐色土層（遺物包含層）（0.3 m）で、以下地山となる。

遺構は、古墳時代の住居址6基、平安時代の石組井戸1基、および時期不明の土塙・柱穴若干を認める。

住居址はいずれも方形で、1辺4 m～6 mの規模をもつ。比較的保存状態の良好な3号住居址は、南北6 m、東西5 mを測り、四柱穴構造を有する。柱穴は径0.15～0.2 m、深さ0.35～0.4 mを測る。中央に径0.5 m、深さ0.15 mの焼土坑がみとめられ、炉跡の可能性が強い。さらに、住居址の壁面に接して北西隅および西側中央には土塙があり、平行する2本の溝で囲まれているところから、何らかの施設の存在が考えられる。

井戸は、この住居址の東南隅を切って構築されている。掘り方は南北3.4 m、東西8 mの方形を呈し、現存深3.4 mを測る。石組み内盤は上辺が1.5 m×1.8 mの柱状力形で、東側で若干張り出している。下辺は南北0.5 m、東西0.95 mの方形である。ただ下辺の軸線と上辺の軸線に90°のずれがあり、上辺と下辺の平面にねじれの位置にある。掘り方の相対関係では石組下盤が柱状掘方の中心に位置しているのにに対し、上盤ではねじれて組み上げたために東の方へずれ、掘り方の軸線とも必然的にずれを生じている。層位的には上層（茶褐色土層）と下層（暗褐色土層）に大きく分れ、上層にはほとんど遺物を含まず、その多くは、下層から検出されている。

遺物

弥生時代の遺物は後期の土器片のみである。古墳時代のものでは、3号住居址から出土した庄内式壺～布留式壺にかけての壺の口縁部、および高杯が出されている。また、平安時代の遺物は、井戸から出土したもののがほとんどで、土器類と木製品類がある。土器類としては、墨色土器、白磁、土釜、綠釉陶器、2点をはじめ、黑色土器、燈明皿、羽釜、土釜、綠釉陶器、

灰陶器、把手付鍋、平豆、須恵器片等がある。2点の墨書き器はほとんど底に近いところの同一箇所で検出され、どちらもほぼ丸形に近い。うち1点は径14cm、高さ2.5cmを測る。底部内面に5行の墨書きがあり、それぞれ左から「中央(央)十公水神王」・「西方十公水神王」・「東方土公水神王」・「南方土公水神王」・「北方土公水神王」とよめる。なお「南方云々」の行は他の行とは逆方向に書かれている。そして口縁部内面に「封」の文字を横に12ならべて書き、それらの文字の上に1枚の墨書きをひいている。他の1点は、径14cm、高さ2.7cmを測り、先のものとほぼ同一の法度を示す。墨書きは内面にまとめられ、底部中央から口縁部にかけて、大きく「天座大神王」、またこれと直角方向に向じて正面から口縁部にかけて、「十二神王」と書かれている。これらの墨書き土器は、井戸を新しく構築した際に、水に住む神を祀ってその怒りを鎮め、井戸の水が枯れないように祈念する祭祀に用いられたものと考えられる。具体的には2つの皿を合口にして紐で結び、土器の中に「天座神」・「水神王」などの神々を封じ込め、井戸に沈めたものであろう。木製品類は曲物、檻、脚踏、一端が黒焦げた棒状木片等がある。その他にマツカサ、モモの種子、ドングリ、ヒョウタン等の自然遺物も出土している。

所 見

今回検出した6基の住居跡は、史跡「鳴上郡衙跡」の北辺一帯に亘る弥生～古墳時代初期にかけての聚落の一帯であろう。この聚落の規模は相当大きなものと考えられ、今後の詳細な調査が期待される。また平安時代の井戸を検出したことは、この辺一帯が聚落址であったことを確実なものにした。(森田)

17. 鳴上郡衙跡(6-M-N地区)

所 在 地 焼津市清福寺町8-8-1

調 查 面 積 7.64m²

調 查 期 間 昭和51年12月13日～12月27日

調 查 経 過

当該地は式内社阿久利神社の南西約50mのところにあたり、分譲住宅の建設が予定されたため、発掘調査を実施した。

遺 墓

層序は耕土(0.15m)、床土(0.15m)、黒褐色土層(0.1～0.7m)、黄褐色粘土～礫層(地山)になる。

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物跡・土塀と弥生時代の整穴式住居跡がある。

掘立柱建物跡(NH₅)は、西側で検出された2間(柱間

2.45m)×5間(柱間1.89m)の南北に長い比較的大きな建物である。主軸はN-E-Wである。

掘立柱建物跡(NH₆)は、中央部で検出された2間(柱間2m)×5間(柱間2.12m)の東西に長い建物である。主軸はN-E-Wである。

掘立柱建物跡(NH₇)は、中央部で検出された2間(柱間1.9m)×2間(柱間1.7mと3.8m)の南北に長い小さな建物である。主軸はN-E-Wである。

掘立柱建物跡(NH₈)は、東側の地山面が急に傾斜する変換地で検出された2間(柱間2.25m)×5間(柱間2.46m)の南北に長い建物である。主軸はNH₈と同じで北東はNH₈の南東の延長線上に位置する。

掘立柱建物跡(NH₉)は、NH₈のすぐ北側で検出された2間(柱間1.9m)×3間(柱間2.1m)の南北に長い建物である。西端はNH₈の延長線上に位置し、規模はNH₈より少し小さい。

土塀(D₁)は、NH₈の南側で検出された長辺2.8m・短辺1.6m・深さ0.2mの長方形の大きなもので底面はほぼ水平である。

土塀(D₂)は、NH₈の南側で検出された長辺約1.6m・短辺0.6m・深さ0.25mの長方形の土塀である。

土塀(D₃)は、南側中央部で検出された長辺約1.2m・短辺0.8m・深さ0.1mの長円形の浅い土塀である。

土塀(D₄)は、南側中央部で検出された長辺1.5m・短辺約0.7m・深さ0.2mの長円形を呈する土塀である。

土塀(D₅)は、東側で検出された深さ0.5mの不整形で大きな土塀である。

整穴式住居跡(YH)は、東側で検出されたもので大部分は調査区域外にあるため、規模等については不明である。

遺 物

黒褐色土層からは、弥生時代後期から奈良時代の遺物が出土した他、柱穴・土塀からも奈良時代の土師器・須恵器片が少量出土している。またNH₈の柱穴からは旧石器時代石器(ヌカイト片)が1点出土した。

所 見

鳴上郡衙跡の遺構のあり方を知ることができた。とくに奈良時代の規則性のある大きな遺構跡は、むしろ、都衙に密接な関連をもつ建物と考えられる。また時期については、主軸が少し東に対し傾れる傾向を示しているため史跡指定地内の建物群と比べると少し新しい時期を考えなくてはならない。(大船)

18. 鳴上郡衙跡(8-4-F地区)

所 在 地 高槻市今坂町164-19

調査面積 189.96m²

調査期間 昭和51年1月21日～1月22日

調査経過

当該地は府立三島高校正門から東約150mの住宅地の西端にあたり、個人住宅の建設に先立って免振調査を実施した。

遺構

層序は耕土(1.5m)、耕土(0.2m)ですぐ下は黄褐色粘土(地山)である。遺構・遺物は、小範囲な調査であったが検出することができなかった。

所見

この付近は府立三島高校を中心とする郡家今城遺跡と、本遺跡の南西部が接する地区であり、両遺跡の関係を知る上で重要な所である。しかし、今回の調査は、少しあとでトレンチ調査であったため、南側-帯の遺跡の拡がりについて明らかにすることはできなかった。(大船)

19. 嶺上部街跡(6-K地区)

所在地 高槻市清福寺町8-7

調査面積 182m²

調査期間 昭和52年1月10日～1月28日

調査経過

当該地は式内阿久刀神社のすぐ南側にあたり、個人住宅の建設に先立って免振調査を実施した。

遺構

層序は耕土(0.2m)、床土(0.1m)、黒褐色土層(0.1m)、茶褐色色土層(地山)である。調査地に現存する古墳や古墳時代から平安時代までの多数の遺構が検出された。

平安時代の遺構は、すぐ南側で検出した石組み井戸に伴う10世紀前半の掘立柱建物跡で2間×2間の倉である。主軸の方向はN-7°-Eである。

奈良時代の遺構は、北東隅で検出した梁行2間の東西に長い建物がある。主軸の方向はN-6°-Wである。

古墳時代の遺構は、東西4.5mを測る堅穴住居跡3基である。いずれも形態・規模・方位とも同じと考えられるが、大部分が調査地区外にあるため、明らかでない。

遺物

全体的に少なく、各柱穴・住居跡から細片が検出されている。

所見

当調査区は、本遺跡の北部にあたり、弥生～平安時代にかけての遺構が最も密集する地域である。調査範囲が小さいため各時代の建物の規模・性格については明らかに出来

なかつたが、周囲の調査結果とあわせて見るならば、即西周邊遺構の北への拡がりを考える上で重要な資料といえよう。(大船)

20. 嶺上部街跡

所在地 高槻市清福寺町21-1

調査面積 4.6m²

調査期間 昭和52年3月7日～9日

調査経過

当該地は式内、阿久刀神社の西約100mの芥川堤防上にあたり、個人住宅の建設に先立って、免振調査を実施した。

遺構

層序は盛土(2.5m)ですぐ下が黄褐色含鐵土層の地山となる。以前、この周辺が竹林であったため、かなりの機乱を受けしており、遺物・遺構ともに認められなかつた。

所見

当調査区と平地との比高差は約3m余りあり、北西に統く丘陵地を削平して竹林となつたことから、今回の調査では郡家今城遺構を検出できなかつた。(富成)

21. 嶺上部街跡

所在地 高槻市郡家本町754-1

調査面積 9.2m²

調査期間 昭和52年3月7日～9日

調査経過

当該地は史跡「嶺上部街跡」の北方にあたり、南北丘陵から東にのびた低高地の南斜面に位置する。今回、農機具貯蔵庫設立に先立って、調査を実施した。

遺構

層序は盛土(0.15m)、耕土(0.5m)ですぐ下が黄褐色色土層の地山となる。遺構・遺物ともに認められなかつた。

所見

今回の調査では、調査面積が狭小なため、遺構・遺物はまったく検出できなかつたが、南北丘陵がこの周辺で急な傾斜でもって落ち込み、ほぼ水平な地山面を形成するところは南に分布する倉庫群の拡がりを予想せざるを得ない。(富成)

22. 郡家今城遺跡

所在地 高槻市水窓町1丁目766-1・2

調査面積 1,836m²

調査期間 昭和52年1月11日～1月19日

調査経過

当該地は府立三島高校の北西約50mにあたり、北側は西国街道に接している。今回、個人住宅の建設に先立って免振査を実施した。

遺構

耕土(0.2m)下、すぐに黄褐色粘土層(地山)になる。

調査区の南東部に柱穴がみられるが、大部分は南側の調査地区外に抜がっていると考えられる。

遺物

柱穴から土師器・須恵器の細片が少量出土した他、併約1cmの八花鏡の破片を南東隅の地面上から検出した。

所見

西国街道の南側にあって、検出した遺構の分布状況から郡家今城遺跡の北西限と考えられる。また当調査区の東側では十駒墓群が検出されており、南側では溝と区画された住居地が検出され、奈良時代から平安時代の築造の歴史を知ることができる。(大船)

25. 宮田遺跡

所在地 高槻市宮田町3丁目42-1

調査面積 9.08m²

調査期間 昭和52年1月20日～2月9日

調査経過

当該地は昭和49年6月に女鶴川の旧河道と奈良時代の掘立柱建物跡を調査した東側にある。今回、分譲住宅の建設に先立って免振査を実施した。

遺構

層序は耕土(0.2m)、床土(0.4m)、黄褐色砂質土層(0.2m)、淡茶褐色粘土層(0.15m)、黒色粘土層(0.15m)、黃灰色粘土(地山)である。

調査区の西側で弥生時代中期の幅1m・深さ1mのV字溝を検出した。調査区の大部分は、北西から南東方向に流れる女鶴川の旧河道である。幅約9m・深さ約1.5mで何回にもわたって流路を変えている。

遺物

V字溝から弥生式土器片と石器が少額出土した。また旧河道の地盤からは、土師器・須恵器の細片が多数出土した。

所見

木造跡は西から東に向って延びた微高地に位置しており、旧女鶴川もそれに沿って北側を流れている。当調査区では、古墳時代の女鶴川が南北方向に流れを変えた位置にあたり、氾濫原であるためか遺構は少ない。堆積層の出土遺物から、もう少し上流に古墳時代の築造の存在が予測され

る。(大船)

24. 富田遺跡

所在地 高槻市富田町4丁目2514-3

調査面積 3,735.27m²

調査期間 昭和51年8月13日～10月15日

調査経過

当該地は普門寺西側の旧富田小学校跡地にあたり、高槻市が公営住宅の建設を予定した。当該地は普門寺の旧境内地であったことから古跡の遺構確認を目的に免振査を実施した。

遺構

層序は盛土(0.2～1.5m)ですぐ赤黄色土(地山)になる。

調査区のほぼ全域から弥生時代後期から江戸時代に至るさまざまな遺構を検出した。

〔弥生時代の遺構〕

調査区の南側に西から東へ走る人溝とその北側に方形周溝基2基と西側の合計3基を検出した。人溝は幅約1.0m・深さ約2mである。今回、検出した遺構の中で最も古く、畿内第Ⅴ様式の初めのものと考えられる。3基の方形周溝基もこの大溝と同時期と考えられるが、後世の削平によつて規模・年代・埋葬施設については不明な点が多い。

〔古墳時代の遺構〕

調査区の中央に方墳を1基、その両方にS字状構1条を検出した。方墳は、一边約1.6mで墓幅約3m・深さ約0.8mの層構がめぐらしくある。埋葬施設は削平されているため検出することができなかつた。時期は周濠内の出土遺物から5世紀末頃と考えられる。S字状構は幅約2m・深さ約0.8mで北から南に走る。時期は6世紀末頃である。

〔難舟時代の遺構〕

掘立柱建物跡は、調査区のほぼ全域にわたって分布している。これらの建物跡は2～3棟免見されており、それぞれ東西南北に走る溝によって区画されたそれぞれの敷地内に存在する。この建物跡は、大別して3群から構成されていると考えられる。地表面が比較的高い西側では、家屋に此のもの大きな建物跡が整然と並び、大きな敷地を有する。この敷地は溝によって区画されているが、その広さは明らかでない。なお、南北の溝によって区画されている幅は約2.2mである。また、地表面が徐々に低くなる東南一帯には、西側の建物と比べて明らかに小さな1間×1間の建物が密集し、建物が同じ場所でかなり建替えを行つたと考えられる。これら東南側と西側の建物群との間に2間×2間の倉庫跡が存在する。

井戸は東南側一帯の小さな建物群の中程に 3基、接近してあり、その規模は直径約 1~2 m、深さ約 1.5 m の素掘りの井戸である。

土塙墓は井戸の東西に 1基ずつを検出した。規模はいずれも幅 0.6 m・長さ 1.2 m である。深さは土塙墓 1が 0.6 m、土塙墓 2が 0.3 m を測り、上塙墓 2からは副葬品として白磁器 1、瓦器残 1、土師器皿 5が出土している。

〔江戸時代の遺構〕

調査区の東側でコ字状の溝と瓦窓を検出した。溝は幅約 2 m、深さ約 1.5 m でさらに東方に続く。窓内からは、江戸時代後期の瓦片が出土している。一方、調査区の程度中央で検出した瓦窓は俗称「ダム窓」と呼ばれ、窓口が左右 2ヶ所にあって両方から同時に燃焼させたものである。床はロストル式にになっている。窓体の規模は長さ 4.8 m・幅 2.6 m であり、窓壁は瓦片と黄色粘土で固められている。なお、この窓口側には灰と灰土が混入した落ち込みが認められた。

遺 墓 物

溝、柱穴、土塙墓、井戸などから出土した弥生式土器、十脚器、須恵器、瓦器、瓦等がある。特に鎌倉時代の遺物が多く、日用雑器である瓦器塊、土師皿、瓦器塊、瓶、青白磁がある。特に注目されるものは直径 9 cm の仿製八俊鏡と上塙墓内から出土した白磁瓶がある。

所 見

今回調査した富田遺跡は、弥生時代後期から現在に至るまで連続と続く複合遺跡である。市街地の南側に位置する富田地区は、発掘調査が一度も実施されたことがなく、現在に至っているが、それだけに今回の調査は淀川北岸の歴史を解明する上で貴重な資料を加えることができたといえよう。特に調査区の全面にわたって検出した鎌倉時代の遺構は、最近の大規模な発掘調査によって類例を重ねつつあるが、中世における集落のあり方を考える上で重要な資料である。(大船)

㉙ 富田遺跡

所 在 地 高槻市富田町 4丁目

調 査 面 積 2.000 m²

調 査 期 間 昭和 51 年 2月 12 日 ~ 2月 25 日

調 査 経 過

当該地は普門寺の南で、8月に実施した市公営住宅建設地に隣接している。今回、個人住宅の建設が予定されたため、調査を実施した。

遺 墓 物

当該地の西隅と中央南側との 2ヶ所に小さな試掘溝を設

定して行った。

層序は盛土(0.8 m)、耕土(0.2 m)、床土(0.1 m)、茶褐色土層(0.15 m)、黄褐色土層(地山)となる。西側に設けた試掘溝では、東側に走る溝と柱穴を検出した。調査区が狭少なため、遺構の性格は明らかでない。なか、東西に走る溝からは鎌倉時代の瓦器塊等が出土している。

遺 墓 物

鎌倉時代の日用雑器類である瓦器塊、瓦釜、土師皿、白磁瓶、青白磁等がある。

所 見

北に隣接する公営住宅地での調査結果も合せて、南一帯には鎌倉時代の集落が拡がっていると考えられる。(高成)

㉚ 富田遺跡

所 在 地 高槻市富田町 4丁目

調 査 面 積 2.000 m²

調 査 期 間 昭和 52 年 2月 12 日 ~ 2月 25 日

調 査 経 過

当該地は昭和 51 年 8月に発掘調査した北側の市立富田幼稚園跡にあたり、普門寺のすぐ西側である。今回市立青少年センターの建設が予定されたため発掘調査を実施した。

遺 墓 物

層序は盛土(0.1 m)赤黄色粘土(地山)になる。

鎌倉時代の建物跡・溝と古墳時代中期の方墳・土塙を検出した。建物跡は平行 5間の南北に長い建物で梁行が調査区城外にあたるため、規模は不明である。溝は幅約 0.4 m・深さ約 0.1 m の南北溝 4本と短い小溝であるが、大部分は開口の基礎によって擾乱されている。調査区の北東側に一辺約 1.0 m の方墳を検出した。溝は約 2~2.5 m・深さ約 0.2~0.5 m で、北側は擾乱されていて不明である。この方墳の北側にもう一つの方墳を検出したが大部分が調査区城外にあたるため規模は不明である。土塙は方墳の南側にあり不整形なもので、遺物等はない。

遺 墓 物

鎌倉時代の瓦器・土師器・須恵器片が少しみられ、古墳時代のものは方墳の底から土師器・須恵器片が若干出土したのみである。

所 見

昭和 51 年夏の調査区の北に隣接した当調査区において、新しく古墳時代中期の方墳を、また鎌倉時代の集落の北限を確認し得たことは、本遺跡の拡がりが、丘陵端部にあたることを示す重要な資料である。(大船)

2. 上水室遺跡

所在地 高槻市水室町 4丁目 518他 6筆

調査面積 3200m²

調査期間 昭和 51年 7月 26日～10月 8日

調査経過

当該地は史跡、今城塚古墳の西方にあたり、女瀬川の河川改修工事が計画されたため、遺跡確認調査を実施した。この調査の結果、鐵倉期の瓦器塚等が出土し、周辺に遺構の存在が推定されたため、調査を実施した。なお、調査は女瀬川改修関連遺跡調査会が行った。

遺構

当調査区は北西から南東方向に大規模な試掘場を設定した状況で、道路の拡張について明らかにしうると考えられた。しかしながら、遺構はほとんど検出されなかった。ただ調査区の南端で土坑墓 1基を検出した。土坑墓は長辺 0.8m、短辺 0.4m の長方形を呈しており、遺物は認められなかった。

調査区の中央より北側にかけては、自然の流路があり、堆積層である砂層内に瓦器塚等が混入していた。

所見

出土した遺物から、周辺に遺構の存在が考えられるが、南端で検出された土坑墓等から、あまり広くない範囲に施設を考えねばならないだろう。（富成）

3. 芥川城跡

所在地 高槻市殿町 64・69

調査面積 9.0 84m²

調査期間 昭和 51年 1月 29日～12月 9日

調査経過

当該地は日本専売公社高槻工場のすぐ西側にあたり、スイミングスクールの建設が予定されたため、発生調査を実施した。

遺構

層序は盛土（0.4m）、耕土（0.8m）、末土（0.15m）、茶褐色土層（地山）である。

調査区の北東部に多数の柱穴と土坑、中央西側で径約 0.7m、深さ約 1.2m の石組み井戸 1基、南側で柱穴と昭和の初期まで使用された給水管 2本があり、通称「ポンボン」こと呼ばれている。

柱穴群は、大部分が調査地区外に拡がっており、建物にまとまるものはなかった。さらに南側は芥川の氾濫を示す形の厚い地盤層があつて、遺構面を流失している。給水管は瓦質のもので径 1.0～1.5cm、長さ約 30cm の大きさのものを連結していた。掘り方は床土面からおこなわれ、江

戸時代に属するのか疑問である。

遺物

中世の井戸・柱穴・土坑から、瓦器・土師器・須恵器・磁器片を少数検出した。その他給水管である瓦質の円筒管が多数ある。

所見

戰国時代の武将・上野長慶で有名な芥川城は、その所在地が標津城の城山と芥川宿の城の内の 2ヶ所に推定されており、城山の方が城郭として有望視されている。

今回の調査で検出した遺構は、中世の聚落跡と給水管だけであり、芥川城に関するものはなかった。（大船）

4. 安瀬遺跡（19-L 地区）

所在地 高槻市大字下 75番地の 8

調査面積 8.2 m²

調査期間 昭和 52年 4月 21日

調査経過

当該地は昭和 47 年に調査された 9 地区の方形周溝墓群から約 150m 西側である。住宅兼店舗建設に先立って調査を実施した。

遺構

耕土・底土を除去すると青色の砂礫・粘土層が厚く堆積しているのを確認したが、遺構・遺物はまったく検出されなかった。

所見

青色の砂礫・粘土層は松尾川の旧流路か、氾濫による堆積と考えられ、中世集落の南の限界を示す資料といえよう。（橋本）

5. 安瀬遺跡（8-O・P、9-M・N・O 地区）

所在地 高槻市高垣町 265番地他 3 筆

調査面積 8.4 406 m²

調査期間 昭和 52年 1月 28日～12月 23日

調査経過

当該地は昭和 47 年に調査した方形周溝墓群の西側約 50m と、昭和 51 年末に調査した 8-M・N 地区の東側一帯である。今回、分譲住宅の建設が計画されたため、調査を実施した。

遺構

農業用水路の関係で西・中央・東区の三つに分割して調査を実施した。

西区では西側半分は遺物包含層もまったく無く、遺構もまったく検出されない。東側の水路近くでわずかに遺物包含層がみられ、掘立柱建物 1 棟と土塙墓 3 基を検出した。

掘立柱建物跡はほぼ東西方向で 1 間（柱間 2.0 m）× 2 間（柱間 2.2 m）である。

土塁墓には幅 0.65 m・長さ 1.6 m・深さ 0.1 m の長方形を呈するものと、直径 1.5 m・深さ 0.5 m では円形を呈するもの、長さ 2.2 m・幅 1.1 m・深さ約 0.6 m を測る不整形のものがある。

中央区は全面にわたって旧拾尾川の流路らしく、床上のすぐ下から砂礫層が厚く堆積してて、遺構は確認できない。

東区では掘立柱建物 8 棟と井戸 2 基、および土塁墓 2 基を検出した。

掘立柱建物跡は調査地区南側で検出されたものでは南北方向である。規模は南北 3 間（柱間 2.2 m）× 東西 1 間（柱間 2 m）以上である。西側に庇を有し、庇の柱間はそれぞれ 2 m である。他の 2 棟は上記の建物の約 7 m 北側に位置するもので、その内の 1 棟は庇構造もわかれ、2 間 × 2 間で柱間は 2 m を測る。他の 1 棟は倉庫と重なり東西 2 間、南北 1 間で柱間はそれぞれ 1.8 m、1.7 m を測る。これらの建物の西側に素掘りの井戸 1 基を検出した。ほぼ円形を呈し直徑約 1.2 m・深さ 0.9 m を測る。また、西北側に長さ 1.1 m・幅 0.6 m の長方形土塁墓を検出した。その他、石組の井戸 1 基と土塁墓 1 基を検出した。石組の井戸は直徑 7.5 cm・深さ 1.4 m を測る。土塁墓は長さ 1.1 m 幅 0.9 m・深さ 0.8 m で内部に骨片がみられた。

遺 物

平安時代末から鎌倉時代にかけての瓦器・土師器・陶磁器が出土している。土私墓から出土した土師器小瓶は底部に小孔をあけていた。また、井戸から土師器小瓶の一軒資料が検出された。

ビット内や盛土層からは中国製の青・白磁や西洋鏡の破片が出土している。

所 見

今回の調査では、西区の中ほどから西へは小世聚落が拡がっていないのが確かめられた。また、調査地区的北西隅に古式土師器を含む包合層がみられ、古墳時代の聚落の拡かりの限界も推定される。（稿本）

31. 郡家本町遺跡

所 在 地 高槻市郡家本町 9 2 5 - 8

調査面積 1.65 m²

調査期間 昭和 32 年 7 月 1 日

調査経過

当該地は鳴上千郡衙跡の西北部にあたる。この地域の実態は必ずしも明確ではなく旧石器や弥生式土器等の出土が伝

えられているに過ぎない。今回、個人住宅の建設が計画されたため調査を実施した。

遺 構

竹蓋と建物基礎のため擾乱が甚しく、遺構は検出できなかつた。なお、層序は盛土層（0.05 m）・黄灰色土（0.8 m）・黄灰色砂礫土（地山）である。

遺 物

土師器破片を若干検出したのみである。

所 見

この周辺に聚落のあることが想像されるが、この地区的調査では手がかりとなる資料は得られなかった。（稿本）

32. 郡家本町遺跡

所 在 地 高槻市郡家本町 1 5 6 7 - 2

調査面積 524.96 m²

調査期間 昭和 58 年 1 月 1 日

調査経過

当該地は市立第 2 中学校グラウンド東側にあたる。この付近では、これまでに明確な遺構については確認されていないが、第 2 中学校グラウンド内から弥生式土器などが出土しているという。今回、建設会社より員寮の建設が計画されたため調査を実施した。

遺 構

社員寮建設予定地の中央部に幅 2 m、長さ約 7 m のトレッチャを設立ところ、遺構・遺物はまったく検出されなかつた。しかし、地山上に暗褐色土層が約 0.2 m 堆積しており、付近に施設跡があるとおもわれる。

なお層序は、盛土（0.6 m）・青灰色土（0.2 m）・黄灰色砂質土（0.15 m）・暗褐色土（0.2 m）・黄褐色砂礫（地山）である。

所 見

地山上に堆積する暗褐色土は築上部衙跡などでは多量の遺物を包含するもので、今回の調査で遺構・遺物が検出されなかつたのが不自然なくらいである。さきに調査を実施した地区（7 月 19 日調査）でも若干の遺物が検出されているとのあわせて、南平台丘陵の裾部に聚落があると想像されるが現段階では明確な資料は得られていない。（稿本）

33. 中城遺跡

所 在 地 高槻市昭和台町 2 丁目 2 5 - 1.2

調査面積 915.0 m² の一部

調査期間 昭和 52 年 9 月 2 日

調査経過

中城遺跡は富田鍛冶によって形成された丘陵の縁辺部に

位置し、從來より、赤生式土器の散布するところとして知られていた。今回、慶應寺の摩崖彌張に先立つて、遺構・遺物の状況を確かめるべく、試掘調査を実施した。

遺構

層序は表上(0.17m)、淡茶灰色土層(0.5m)、茶灰色含礫土層(0.6m)、茶褐色摩崖(地山)となる。淡茶灰色土層は今様の瓦を多く含む整地層である。遺構は検出されなかつたが、茶灰色含礫土層は良好なものであつた。

遺物

茶灰色含礫土層(遺物包含層)から陶器細片を検出した。

所見

該地区は以前慶應寺の渡り廊下のあつたところで、上層部はかなりの擾乱をうけている。しかし下層部から検出した包含層はほとんど遺物を出土しなかつたものの、良好な遺存状態を示していることから、周辺での遺構存在を推定できる。(森田)

34. 今城塚古墳

所在地 高槻市郡家新町所在

調査面積

調査期間 昭和52年7月28日~8月13日

調査経過

史跡今城塚古墳の後円部背後の周溝は郡家地区の農業用水溜池として利用されてきたが、最近漏水が激しく、このまま放置すると古墳の外殻が決壊する恐れが生じたため、国庫補助金の交付をうけて外堀(後円部のみ)の修築を行うことになった。

修築工事は市水政部水政課に依頼したが、できるだけ現状を維持することでT法等の打ち合せを行ひ、工事着手前に先立って古墳築成時の遺構・埴輪列の有無について資料を得るために調査を実施した。

遺構

調査は外堀に4本のトレッセを設定し、さらに内堀と外堀との護土堤に3本のトレッセを設けた。

各トレッセの基本的な層序は、表土下に鹿糞物や粘土をまじえた擾乱土や二次的の盛土がみられ、この下層に黄土あるいは黄灰色粘土の地山を検出した。

いずれのトレッセからも、古墳築成に関する遺構や埴輪列はまったく検出されなかつた。

遺物

円筒埴輪破片若干

所見

外堀の内外は灌漑による影響によってかなり浸食されていることが明らかで、築成時の形態よりかなり変化している

ことが考えられる。築成時の詳しい形態等について資料を得るまでにはいたまなかった。(鶴本)

35. 塚塚X-1号墳

所在地 高槻市塚塚1丁目314-2外

調査面積 350m²

調査期間 昭和52年6月3日~7月11日

調査経過

塚塚古墳群は帝仕山の山頂から山裾にかけて、四十数基の古墳が分布している。そのほとんどが、南斜面および山裾を流れる谷川沿いにある。今回、調査した古墳は、現在までまったく不明の古墳で、個人住宅の建設を差しめにあたり、土地造成中に横穴式石室の一部が発見され、所有者の川上氏の協力を得て、緊急発掘調査を実施したものである。

遺構

塚塚X-1号墳は、帝仕山の南斜面、標高50mのところにあって、径1.2mの円墳である。主体部は両振式の横穴式石室で、石室の全長7.5m、玄室長3.5m、幅1.4m、羨道長4m、幅1mを測る。床面には、小石を敷き並べたところとすこしきめの石を敷き並べたところが認められた。この歌石上には格台用に用いられたとされる人頭大の石があり、木棺に用いられた鉄釘をその周辺で検出した。鉄釘の遺存状況から、玄室内に埋葬された被葬者は3体以上、羨道部分に埋葬されたものが1体と考えられる。石室入口から約1m余り羨道に入ったところには閉塞石がある。

石室の遺存状態は良く、天井石が石室内に落下しているものの、築造時の状態に復原するものであった。玄室の天井石は4枚、羨道部分は1枚であった。空巣は北に焼く斜面部分のみ認めた。石室の床面から天井石内面まで約2.6mを測り、石室側面はかなりの傾斜があるため、奥壁部分の地山面は石室高のほぼ $\frac{2}{3}$ まで掘り下げられていて、斜面をうまく利用して築造されたものと考えられる。

なお、排水角は認められなかつた。

遺物

玄室内からは鉄釘、金環2セット。(太いものと細いものがある。)須恵器片、土師器片が出土した。羨道内からは鉄釘、須恵器片上飾器、甕が出土している。

所見

石室内から出土した遺物および石室の規模・形態から?世紀初め墳と推定される。

なお、当該古墳は現地での保存が困難なところから、市立埋蔵文化財調査センターにおいて移築復元を行ひ、文化財保護思想の普及に役立てたいと考えるものである。(富

36. 水室塚古墳

所在地 高槻市水室 590-6

調査面積 135.27m²

調査期間 昭和52年1月11日

調査経過

当該地は水室塚古墳の墳丘のすぐ北側にあたり、個人住宅の建設に先立って、発掘調査を実施した。調査は3m×4mのトレンチを敷地中央部に設定して、層序の観察をおこなった。

遺構

層序は、盛土(0.2m)、黄褐色土層(0.5m)、青灰色粘土である。周囲の状況から想定して、濠の中央部であろうと考えられる。

遺物

遺物はまったく出土しなかった。

所見

現在、水室塚古墳は市街地になっており、形状・規模・時期等については一切不明である。しかし、すぐ東側には史跡今城塚古墳・前原古墳が立地し、南平台丘陵の弁天山古墳群を含めた王權の系譜を考える場合、どうしても欠かせない位置を示している。今回の調査は、濠が墳丘の周囲をめぐっていたと考えられる資料である。(大船)

37. 二子山古墳

所在地 高槻市上土室町所在

調査面積 7.6m²

調査期間 昭和52年1月12日～53年2月7日

調査経過

当古墳は現體天皇陵北側に位置する墳丘全長約40mの前方後円墳で、墳丘のみ宮内庁鏡墓参考地となっている。昭和54年名神高速道路建設に伴う考古発掘調査が行なわれた。その結果、墳丘は現況より縮少していることが判明した。今回、大阪府営當木道航便事業にともない、本管埋設のためのビットが当古墳の濠と考えられる地点に予定されたところから、事前に試掘調査を実施し、調査結果をもとに工事用ビットの規模を決定することになった。調査は財團法人大阪文化財センターが実施した。

遺構

前方部北側の墳丘側と周濠、および、後円部側周濠の両が確認された。

遺物

円筒埴輪破片・家型埴輪破片・朝鮮形埴輪破片・須恵器

片が出土した。

所見

部分的な調査ではあったが、当古墳の前方部前開幅がおよそ8.0m程の規模であることが判明した。

38. 十保山古墳

所在地 高槻市十室町所化

調査面積 4.6m²

調査期間 昭和52年1月2日～53年2月7日

調査経過

当古墳は名神高速道路建設にともない消滅したが、周濠は未調査である。今回、二子山古墳と同じ経緯で、大阪文化財センターが調査を実施した。

遺構

古墳時代埴輪面に小窓と小ビットを検出したが周濠は確認できなかった。

遺物

円筒埴輪破片が出土している。

所見

土保山古墳北側にある甲道の西側部分で周濠が検査出来るとと思われたが、周濠の位置などは名神高速道路下にあると考えられる。

39. 岐上郡面路

所在地 高槻市川西町1丁目962・971-1

調査面積 7.97m²

調査期間 昭和52年4月21日～5月27日

調査経過

当該地は市立川西小学校の東側にあたり、分譲住宅の建設が予定されたため発掘調査を実施した。

遺構

層序は盛土(0.8m)、耕土(0.1m)、床土(0.2m)、茶褐色土層(0.7m)、茶褐色土(堆山)である。

検査した遺構は、不規則で不整形な土塙基多數と、柱穴を検査した。土塙基は長径1～3m・深さ0.1～0.8mとさまざまで、規模・方向・形態等あらゆる点について規則性は認められない。

遺物

土塙基・柱穴等の遺構からは、遺物の出土はなかった。わずかに北東部の茶褐色土層から須恵器の壺・杯と土師器片が少量出土した。

所見

当調査区周辺では、弥生時代中期からの墓地群が形成され、これまでの調査においても遺物の出土しない土塙基群

が、方形周溝墓とともに検出されているところから、今回の調査で検出した多数の土塁墓は、方形周溝墓の周辺に埋葬された同時期のものと考えられる。調査区の東北部にまとまった状態で認められた柱穴は、5世紀末頃の時期のものと想定される。(大船)

40. 岐阜郡高野町

所在地 高根市清福寺町 5-1-8

調査面積 184.21m²

調査期間 昭和52年4月25日～4月30日

調査経過

当該地は史跡「山上郡西跡」のすぐ東側にあたり、個人住宅の改築が予定されたため、免査請求を実施した。トレンチは基礎をよけて中央部に4m×6mの範囲で上層の觀察・遺構の有無を調査した。

遺構

層序は、礫層(0.4m)、耕土(0.15m)、灰土(0.15m)、黒色土層(0.25m)、茶褐色土(地山)である。

検出した遺構は、径20cm～40cmの小さな柱穴12個と長さ1.4m・幅0.7m・深さ0.2mの土塁1基である。

遺物

柱穴から弥生式土器、土師器、須恵器の破片が若干出土した他、黒色土層からも上層器、器皿が少數出土した。

所見

調査範囲が狭少なため、明確な遺構を検出することができなかつたが、郡衙関係の遺構が東方に並がっていることを予測される資料であろう。(大船)

41. 岐阜郡高野町

所在地 高根市郡家新町 2-4-9

調査面積 1,268m²

調査期間 昭和52年5月10日～6月28日

調査経過

当該調査地区は神社社の南約150mにあたり、すぐ南側を西四街道が通っている。当該調査区のすぐ西南方では旧山陽道が検出されていて、小字名が高岸であるところから郡衙と何らかの関係がある地域ではないかと考えられてきた。今回、露天駐車場が設置されることになったため、免査調査を実施した。

遺構

耕土、灰土を除去するとすぐC柱穴が検出される黄褐色の粘土層となる。検出された遺構には古墳の濠、上塁墓、山陽道の北を面する溝および乾燥とした東西方向の溝、さらに井戸がある。

古墳の濠は調査区南側で検出されたもので、古墳の西北部分にある。濠の深さは約0.8m、幅は4.5～7mを測り、一部分しか検出できなかったため、横形は明らかでない。

この古墳の北側一帯に七塚墓があり、35基以上を認めめた。10基程度で一群を形成するようである。土塁墓の規模は大きいもので、長さ4m・幅1.7mを測る。深さはいずれも0.1～0.2m程度を測り、共に、遺物がほとんど検出されないため、時期は明確でないが、孤塚古墳群や岐阜郡高野町等でみられるように、今回検出した古墳と同時期のものであろう。

古墳と重複して山陽道の北側を面する溝が脇位を異にして2条検出された。2条の溝の内、新しいものは幅1m・深さ0.1mを測り、黄褐色の砂礫が堆積している。西南方で検出されている溝とつながるものと考えられる。一方、時期の古いものも、幅・深さともにほぼ同規模で北に約2m程かたよっている。なか、この2条の溝は現地理と約25°の差を示す。

井戸は調査区の北西部で検出した。径1.1m・深さ1.2mを測り、素掘りで円形を呈している。井戸内から古式土器が出土している。上塁墓群に近い時期のものであろう。

この井戸のすぐ北側には幅2m・深さ約1.2mで東西に走る溝があり、この溝底は部分的に浅くなり、調査区内でも2箇所が浅くなっている。溝内からの遺物はほとんど検出されず、時期については明確さを欠く。方向は東西方向に対し、約5°方向を異にする。

遺物

古墳の濠内から須恵器、埴輪が出土している。また、土塁の埋土内からナイフ形石器1点を検出した。

所見

藤沢一夫氏は最近の論者で岐阜郡高野町の郡衙の位置を当査区のすぐ北側の水田に比定されているが、今回の調査では直接郡衙と関連する遺構・遺物は検出されなかつた。ただ、調査区北側で検出した溝は岐阜郡衙のこれまでの調査では例がないものであり、今後の調査に課題を残した。

今回の調査では、山陽道の北を面する溝が検出されたが、前後2回以上山陽道がつくられれていることを示す資料といえる。

また、郡衙成立を知るうえで、古墳と土塁墓群の検出は重要な資料といえる。(機本)

42. 岐阜郡高野町(28-0地K)

所在地 高根市清福寺町 8-8-1-1

調査面積 577.6m²

調査期間 昭和52年5月27日～7月8日

調査経過

当該地は史跡「鳴上郡衙跡」の約80m東側にあたり、個人住宅の建設が予定されたため、発掘調査を実施した。

遺構

層序は、耕土(0.2m)、床土(0.2m)、整地層(0.1m)、暗褐色土層(0.5m)、茶褐色土層(地山)である。

調査区の南側で幅約2.4m・深さ約0.4mの古墳時代後期の東西溝と、調査区の西側で平安時代の建物跡2棟および南北溝2本を認めた。建物跡は、その方向が、西北に一致するものと東に約8°振るものがあり、同一場所で重複している。大部分は調査地区外にあり、規模等については不明である。南北溝は2本ともほぼ西北に一致し、溝内から10世紀前半の黒色土器が出土した。

遺物

平安時代の建物跡の柱穴・南北溝からは、黒色土器・土師器・須恵器が若干出土した。古墳時代の東西溝からは、小範囲の調査であったが多数の須恵器の蓋杯が十箇器片とともに出土した。一方、暗褐色土層は芋川の旧氾濫原の堆積層であって、上流から流されてきた弥生式土器、土師器、須恵器がその中から多数出土した。

所見

当調査区附近は、6世紀頃に古墳時代の集落が芋川沿いに形成されたらしく、周辺での調査の結果からも、それを証明しうる資料がある。また、郡衙関連遺構に関する新しい知見を得られなかったが、それなりに東側の建物群の拡がりを限ることができた。10世紀前半の建物群は、本道跡北側でも數多く検出されており、律令制度崩壊後の遺跡のあり方を考える上で重要である。(大船)

44. 鳴上郡衙跡

所在地 高槻市川西町1丁目972-8

調査面積 98.34m²

調査期間 昭和52年7月25日～8月11日

調査経過

当該地は市道辻子・下ノ口根と西国街道が交差する地点から南西約150mのところである。今回、分譲住宅が予定されたため発掘調査を実施した。

遺構

層序は、耕土(0.15m)でなく黄褐色粘土(地山)になり、床土・包含層はなかった。検出した遺構は、方形周溝墓1基と方墳2基および土塙墓2基である。

方形周溝墓は、調査区の北東部で検出したもので、一辺5mを測る。周溝はコの字状で幅1.2m・深さ0.1mであ

る。

1号方墳は、西側で墓の一部を検出したのみで、大部分は調査区域外にあり、規模・時期については不明である。

2号方墳は、調査区の南側で検出したもので、東濠のみが調査区域外にある。規模は一辺1.1mで、南辺に幅5m・長さ4mの造り出しがあり、周囲には幅4m、深さ0.2～0.5mの濠がめぐる。

1号土塙墓は、1号方墳の東側で検出されたもので、長辺2.4m・短辺1.1m・深さ0.25mを測り、底面はほぼ水平である。方向はN=30°～Eである。なお、南東隅に須恵器の蓋杯をセトで副葬していた。2号土塙墓は、2号方墳の西側で検出されたもので、長辺2.1m・短辺1.3m・深さ0.2mの長円形を呈し、底面は舟底形である。方向はN=15°～Eである。

遺物

方墳の濠からは、須恵器、土師器、埴輪の破片が多数出土した他、1号土塙墓より須恵器の蓋杯がセトで出土した。

所見

山陽道から南側一帯では、集落群を推定する遺構が少なく、むしろ墓地群が広がっていた可能性が強い。本年度調査した65-G地区でも山陽道の下から古墳が検出されている。また、弥生時代の方形周溝墓群も、本調査区の南側で検出されており、弥生時代中期からの墓域であったことが想定される。(大船)

44. 鳴上郡衙跡

所在地 高槻市川西町1丁目972-8

調査面積 98.34m²

調査期間 昭和52年7月14日

調査経過

当該地は、市立川西小学校の南にあたり史跡「鳴上郡衙跡」に隣接するところである。今回、工場増設に先立ち調査を実施した。

遺構

層序は盛土(0.2～0.5m)、耕土(0.15m)、淡茶褐色土層(0.3m)〔一部〕、灰緑色土層(0.1～0.2m)〔一部〕、灰褐色砂質(0.1～0.3m)、暗褐色土層(0.2～0.3m)、青灰色粘土層(地山)となる。断面観察によると、調査区の北よりのところでは、耕土の段差(0.3m)があって、南側が低い。また、調査区の北端では、暗褐色土層を振り込んだと考えられる構造遺構(溝中に灰色砂層)を検出した。

遺物

遺物は出土していない。

所見

地山上で検出した暗褐色土層は、周辺部分の調査結果から、弥生～古墳時代の遺物包含層と認定できよう。とすれば、検出し得た溝状遺構は、古墳時代以降ということになり、山陽道の南の開拓を考えるのが妥当であろう。（森田）

45. 岡上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町 161

調査面積 47.6m²

調査期間 昭和52年1月15日～12月5日

調査経過

当該地は岡上郡衙跡の西南部にあたり、8月に方墳等を検出した74-D・H地区の北東に隣接する。今回、個人住宅建設に先立ち発掘調査を実施した。

遺構

厚さ0.2mの耕土下は灰褐色粘土層の地山で、遺物包含層や整地層の類はみとめられなかった。遺構は、明治～大正時代にかけてのダム窓2基、井戸1基、および窓にともなう粘土こね用の十軒8基を検出した。さらに、瓦用粘土上を採取した痕と思われる落ち込みが認められた。ダム窓はいずれも基底部のみ遺存し、内部は、瓦片、窓壁がつまっていた。おそらく窓廃絶後に削平されたものであろう。1号窓は長径3.65m、短2.55mを測る。2号窓も1号窓とはほぼ同じ規模である。井戸は1辺0.9mの方形で、枠には、12枚の板材を用い、それらを上下2段の横木で固定している。振り方は一辺約1.9mを測る。

遺物

窓体内から出土した瓦類が主なもので、他にみるべきものはない。

所見

今回、検出したダム窓は、昭和51年高田遺跡で検出したものと同じものであるが、窓場の構成要素である井戸遺構と併せて検出したことに意義があろう。この調査区の北側を通る旧西国街道沿いには、昭和初期まで、小規模な瓦窓が營まれていたといわれてきたがその実体は不明であった。今回の調査は、それを検証したことと同時に、近郊地域における近代窓業を考えるうえで、貴重な資料を提供することになろう。なお、郡衙関連遺構は認められなかつた。（森田）

46. 岡上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町 233-11

調査面積 80.548m²

調査期間 昭和52年1月18日～30日

調査経過

当該地は岡上郡衙跡の西南方にあり、昭和50年9月大阪府教育委員会によって、弥生時代の方形周溝墓を検出した地区の東80mの地点である。今回、個人住宅の建設に先立ち、調査を実施した。

遺構

層序は盛土(0.6m)、耕土(0.25m)、床土(0.15m)、暗黃灰色粘土層(0.15m)、淡黃灰色粘土(地山)となる。

暗黃灰色粘土層から、わずかに土器の細片を検出したものの、遺物包含層といえるほどのものではない。また地表面においても、遺構は認められなかつた。

遺物

土器系の細片と考えられるが、器形、時期等は不明。

所見

調査範囲が狭少であったためか、郡衙関連遺構はもとより、弥生時代の遺構等をも認められなかつた。当該地は岡上郡衙跡と郡家今城遺跡の中間に位置しながらも、どちらの聚落にも含まれない外辯地域と考えられる。（森田）

47. 岡上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町 360

調査面積 1,137m²

調査期間 昭和52年1月28日～12月27日

調査経過

当該地は、史跡「岡上郡衙跡」の西南方約300mのところ、旧西国街道の北側約30mに位置する。今回、駐車場造成に先立ち、発掘調査を実施した。

遺構

まず最初に遺構の有無を確かめるべくトレーンチ調査を実施した。トレーンチは南北30m、幅1.5mである。層序は耕土(0.15m)、灰褐色粘土層(地山)であるが、南北分は幾つか塊をうけていた。また北側では灰褐色粘土層上に、灰褐色砂層の間層が部分的にみとめられた。調査区の北端で、灰褐色砂層下からサヌカイト製の舟底形尖頭器および剣片を検出した。このため、調査区の北側を東西10m、南北5mにわたって拡張したところ、およそ東西5m・南北5mの範囲にわたって石器および剣片の散在が認められた。その西側からは、こぶし大の石で構成された切り跡状の遺構を検出した。

遺物

サヌカイト製のナイフ形石器1点、舟底形尖頭器8点、

標器 1 点、網片（チップを含む）600点余、および塵（チャート、その他）1,000点以上を検出した。それに擾乱層から、土師器・須恵器片が出土している。

所 見

今回検出した多数のサスカイトの刷片は、長さ 2cm未満のものが圧倒的に多く、長さ数mmというのも少くない。そして、これらの刷片は、多くの礫とともに、一枚な平面で検出しており、若干の舟底形尖頭器の製品、半製品を作出することも考え合わせると、この刷片の抜きが石器製作社と考えるに充分である。また 5m × 5m という刷片の武がりは、昭和 49 年に調査した郡家今城遺跡の 1 単位の抜がりと近似していることも興味深い。ところが、郡家今城遺跡の石器が国府型ナイフ形石器を主体とするのにに対し、今回の調査では、国府型ナイフ形石器はもとより、圓状刷片の断片をも検出しなかった。なお、当該調査区の調査は、53 年度も引き続いて、調査を実施する予定であるので、遺構の性格等については、今後に期待される。（森田）

48. 郡家今城遺跡

所 在 地 高槻市水室町 1 丁目 773-1

調査面積 200 m²

調査期間 昭和 52 年 7 月 4 日～7 月 6 日

調査経過

当該地は府立三島高校の西北にあたり、郡家今城遺跡の西北への拡がりが不明確である。今回、住宅建設に先立って調査を実施した。

遺 構

調査区の中央部に 1m × 3m の試掘孔を設けたところ若干の遺物を検出したが、遺構は認められなかった。

なお、層序は耕土（0.1m）、黄灰色土（0.1m）、暗褐色土（0.05m）、黄色土（地山）である。

遺 物

暗褐色土層から黑色土層・下部破片若干を検出した。

所 見

郡家今城遺跡の西北への拡がりを確認することができた。
(森田)

49. 鶴原寺跡

所 在 地 高槻市鶴原 1 丁目 1283

調査面積 1,137 m²

調査期間 昭和 52 年 9 月 7 日～11 月 11 日

調査経過

鶴原寺跡は安瀬川東南岸に位置し、旧西国街道に面している。以前から福山神社を中心に古瓦が広く採集されてい

たが、これまで免震による調査はおこなわれておらず、その実体は不明であった。今回、私立保育所建設に先立って免震調査を実施した。

遺 構

調査の結果、鎌倉時代後半を中心とする遺構面（生活面）と奈良時代を中心とする遺構面が上位に検出され、複合遺跡であることがわかった。奈良時代の遺構としては、摺立柱建物跡 4 棟および柱穴列がある。なかでも東より検出した 2 間（往間 2.7m）× 7 間以上（耗間 2.8m）の南北に細長い建物跡は、一辺 1m 以上の柱穴からなっており、郡衙中心域の建物跡の柱穴と匹敵するものである。また、柱穴の 1 つには径 0.8m の柱根を検出していることなど、奈良時代の建物跡としては相当規模の大きいものであり、鶴原寺に隣接する遺構と考えてよい。ただ、基壇・礎石の段がみられるところから、僧坊等の遺構と推定される。鎌倉時代の遺構としては、礎石を有する建物跡 1 棟、摺立柱建物跡 2 棟、石組井戸 2 基・土塁 14 基の他、瓦窯・石敷・列石等がある。このような中世の村跡は高槻市内の宮田・上牧・安満寺でも知られており、今回の調査によって、さらに資料が累積された。

遺 物

白鳳時代から奈良時代にかけての多量の瓦類をはじめ円面鏡・須恵器・土師器・瓦器・陶器などが出土している。

所 見

今回検出した奈良時代の建物跡は規模も大きく、その配置にも計画性がみられ、鶴原寺関連遺構と考えて大過ないと思われる。なお調査地区的南には「大門」という字名の残る一面があり、今後の調査如何によっては、鶴原寺の見体像を明らかにすることも可能である。さらにこの寺跡の東北部には、数基の瓦窯のあることも知られており、鶴原町一帯は古代寺院の成立を理解するうえで看過できないものがある。（森田）

50 大藏寺遺跡

所 在 地 高槻市大藏町 3 丁目 210

調査面積 343 m²

調査期間 昭和 52 年 6 月 20 日

調査経過

当該地は大藏寺遺跡の中心部と思われる地点である。今回、住宅建設に先立って、遺構の有無、遺物包含層の状態を確かめるべく、トレーン調査を実施した。トレーンは当該地の中央部に南北方向（長さ 1.2m）に設けた。

遺 構

層序は、耕土（0.5m）、耕土（0.2m）、床土（0.5

m), 茶褐色土層(0.4~0.7m), 淡茶褐色砂質層(地山)である。なお、トレーンチ北側の床土下で、暗褐色土層(0.04m)の間層を検出した。遺物包含層である茶褐色土層は砂質気味で堆積土と考えられる。地山は若干の起伏をもつ、遺構等は検出できなかった。

遺 物

弥生式上器(中・後期の高杯・壺片), 布留式土器(壺片・壺片・高杯片), 奈良時代の土師器(壺片), 黒色土器片, および須恵器(壺片・壺台片・杯片)がある。その他、若干の瓦片。全体としては、弥生時代末~古墳時代中頃までの上器が多い。

所 見

遺物包含層の状態及び遺物のあり方からみて、当該地の北ないし、東方に弥生~古墳時代にかけての集落の存在が考えられる。(森田)

51. 宮田遺跡

所 在 地 高槻市宮田町 3丁目 4-1

調査面積 964.91m²

調査期間 昭和52年7月12日~7月18日

調査経過

当該地は春日神社の道を隔てた南側にあたり、店舗付高層住宅の建設が予定されたため、発掘調査を実施した。

遺 構

耕土(0.2m)下はナ GIC黄褐色粘土層(地山)になり、床土・包含層はなかった。

検出した遺構は、西南隅の落ち込み1ヶ所と数個の柱穴だけである。

遺 物

北東部にあった遺跡の埋土から、土師器・須恵器・瓦器の破片が若干十数点している。

所 見

宮田遺跡の西北側に位置する春日神社一帯では、弥生時代中期からの遺物が採集されており、東方側で調査された中世集落の前身にもなる占い時間の集落の存在が予想された。しかし、このようを予想に反して遺構はほとんど検出することができなかつた。(大船)

52. 宮田遺跡

所 在 地 高槻市宮田町 3丁目 4-8~8

調査面積 1,562.89m²

調査期間 昭和52年8月11日~9月25日

調査経過

当該地は春日神社から南約100mにあたり、分譲住宅

の建設が予定されたため発掘調査を実施した。

遺 構

層序は耕土(0.2m)で、西側は黄褐色粘土(地山)になるが、東側では床土(0.4m)が敷かれている。大きく2群に分かれる鍛冶窯跡の層群が溝によって区画されている。その内外に井戸10基、上部墓3基を認めめた。また調査区を北西から南東方向に流れる幅2.5m・深さ1.5mの自然の流路があり、6世紀代の遺物を含めている。その他、弥生時代中期の幅1m・深さ0.6mのU字溝が2本並行して東西に走っている。

遺 物

弥生時代から中世までの各時代の遺物がある。特に中世の遺物に伴って出土した瓦器・土師器・須恵器・鉄器は多層に出土した。その他、宋鏡・舟井杓の曲物がある。弥生時代・古墳時代の遺物は少なく、自然の流路とU字溝から出土している。

所 見

検出した鍛冶窯跡の集落は、以前調査した100m東側の層群と同時期で東西に並んでいるらしいことが推測され今後、中世集落のあり方を考える上で重要な資料といえる。

(大船)

53. 富田遺跡

所 在 地 高槻市富田町 6丁目 17-2

調査面積 504.76m²

調査期間 昭和52年4月26日~27日

調査経過

昭和51年夏に調査を実施した富田遺跡の南約100mに位置する。今回、住宅建設に先立ち、富田遺跡の南への伸びりを検査するために、試掘調査を実施した。試掘にあたっては、南北8mのトレーンチを設定した。

遺 構

層序は淡黄色土層(盛土)(0.8m), 淡茶灰色土層(0.2~0.8m), 淡茶色土層(0.2m), 茶褐色土層(0.1~0.5m), 地山となる。このうち淡茶灰色土層以下3層は、遺物を含む。なかなか土層面で遺構らしきものは検出できなかつた。

遺 物

範囲層である茶灰色土層から、弥生式土器・土瓶器・陶壺片が、また淡茶色土層から土師器片(痕明皿)・三足土器の脚片が、茶褐色土層から弥生式土器片(後期)が、それぞれ出土している。とくに灰茶色土層と茶褐色土層との時期差は、51年度に調査した富田遺跡の知見とも符合する。

所 見

今回の調査区は南へ張り出した台地の縁辺部に位置し、その地表面は南傾している。しかし、調査の結果、地山面は北方向に落ち込んでいるところから、小規模な開拓谷の

存在が考えられる。遺構は検出されなかつたが、遺物包含層の状態から推して、富田遺跡が当該地帯にまで及んでいることが充分に考えられる。(森川)

Ⅲ 高槻市文化財一覧

種 别	件 名	所在 地	管 理 者	指 定 年 月 日
〔国指定〕				
国 宝	金銅石川年足墓誌 付木彫残(銅釘付)一括	真上町	田中伊久 神峯山寺	S.27.8.29 S.25.8.29
重 要 文 化 財	木造 僧觀音立像 二躯 〃 阿弥陀如来坐像 〃 駕觀音立像 〃 観沙門天立像 〃 千手觀音坐像 絹本着色 探花図 石觀音 普門寺方丈	原 〃 本山寺 〃 本山寺 浦堂本町 城北町 富田町	〃 〃 〃 〃 安岡寺 権本末吉 普門寺	〃 〃 〃 〃 S.49.6.8 S.38.7.1 S.52.1.28
旧法による重要美術品	石造 灯籠 今城塚古墳	天神町 郡家新町	上宮天満宮 高槻市	S.17.5.30 S.33.2.18
史 跡	輪上郡御跡附寺跡	清福寺町他	〃	S.46.5.27
〃	石川年足墓	真上町	四	—
〔府指定〕				
史 跡	高槻城跡	城内町他	高槻市	S.25.5.1
〃	高山右近高槻天主教会堂跡	野見町	〃	S.25.5.9
〃	西因街道芥川一里塚	芥川町	芥川東部落会	S.16.5.14
名 論	紙津狭	原・駒脇	高槻市	S.18.5.11
名 論	普門寺庭園	富田町	普門寺	S.46.3.31
有 形 文 化 財	教宗寺の石塔	芥川町	教宗寺	S.49.8.29
〃	八坂神社の石燈	原	八坂神社	〃
〔市指定〕				
有 形 文 化 財	笠井家住宅 本山寺文書 2巻	解体保管中 原	高槻市 本山寺	S.47.9.12 S.99.3.30
〃	大川水帳(高山帳) 2冊	東天川	森田亮吉	〃
〃	集聞家文書 3巻	桂本町	集聞正造	〃
〃	成合春日神社雨乞祭員一式	成合町	春日神社	〃
〃	木造大日如来坐像1躯	大字田能	田能自治会	S.51.6.1
史 跡	下田御高札場	下田部町	下田部自治会	〃



a 千手觀音坐像（安岡寺）修理前



b 千手觀音坐像（安岡寺）修理後



a 普門寺方丈



b 鳥居 元和八年（磐手社神社）

燈籠 正保三年（磐手杜神社）

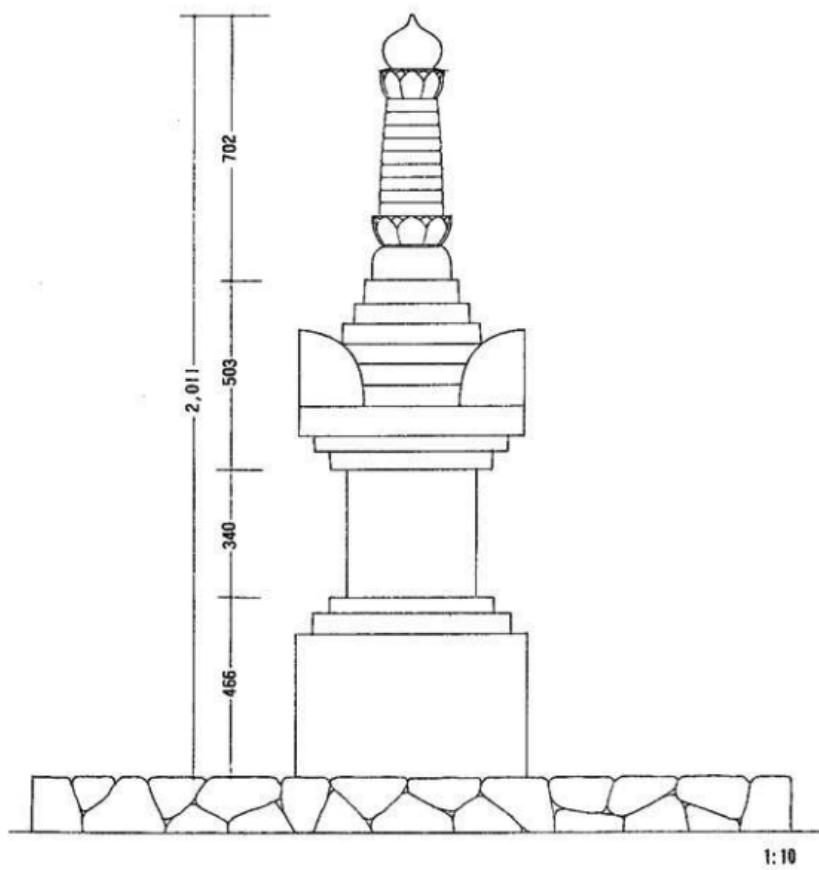


五輪塔 宝永五年（神峯山寺）





本山寺石造宝篋印塔



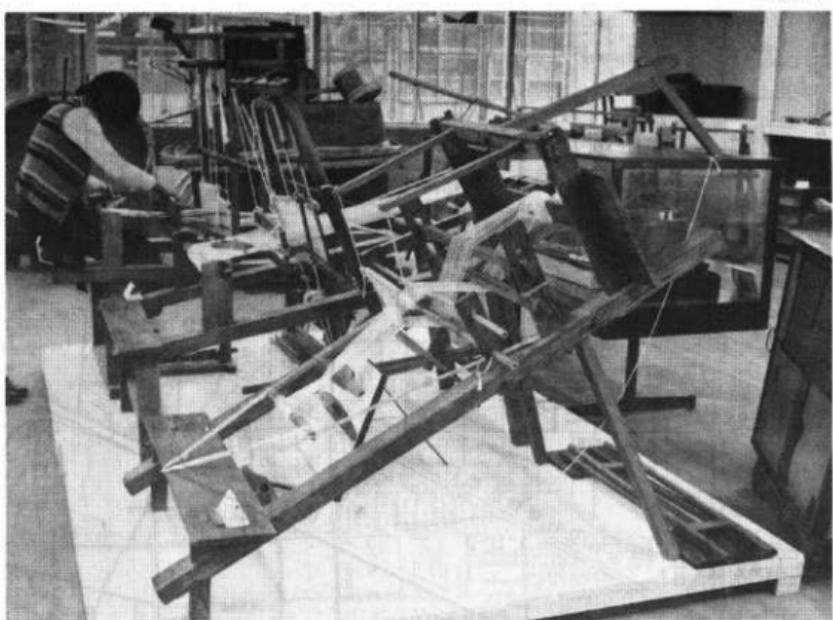
本山寺石造宝篋印塔実測図



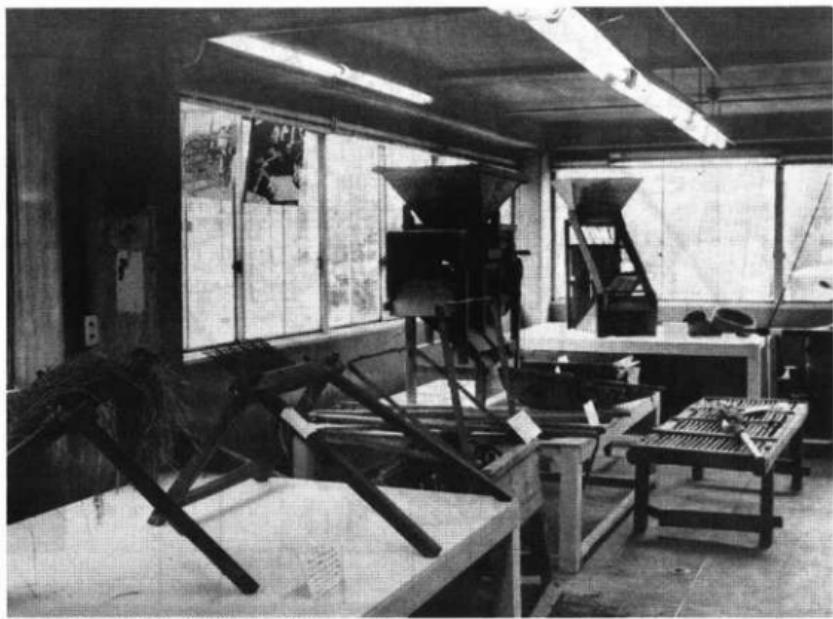
宝 塔（本覺寺）

宝篋印塔 貞和三年（神峯山寺）

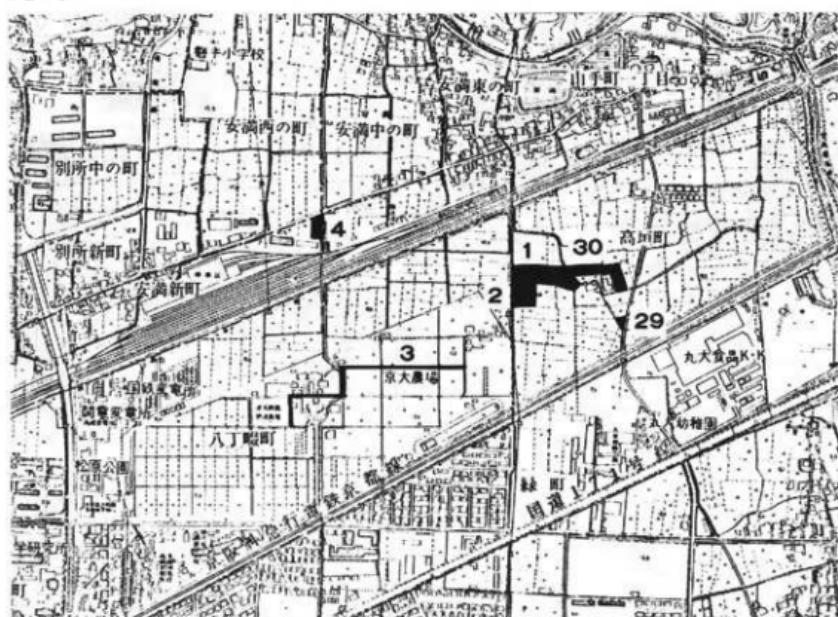




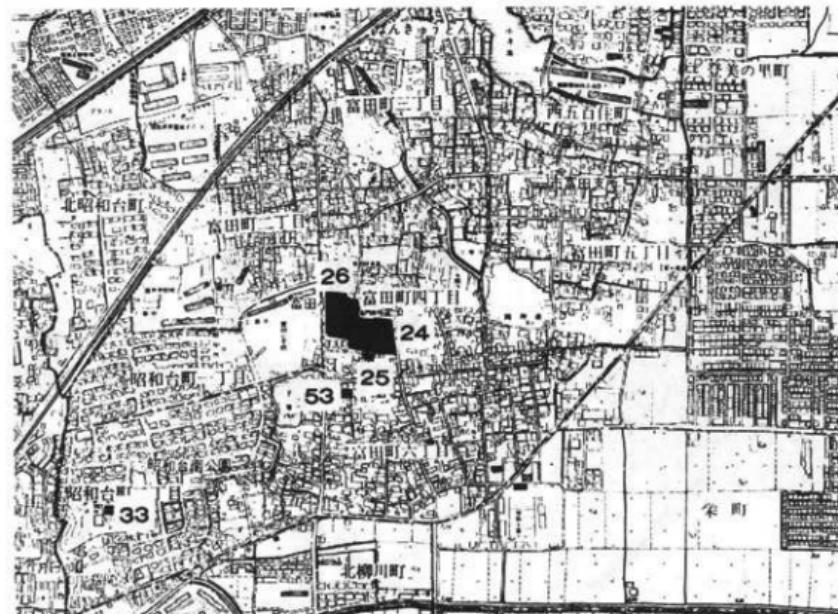
a 民俗文化財展（高機など）



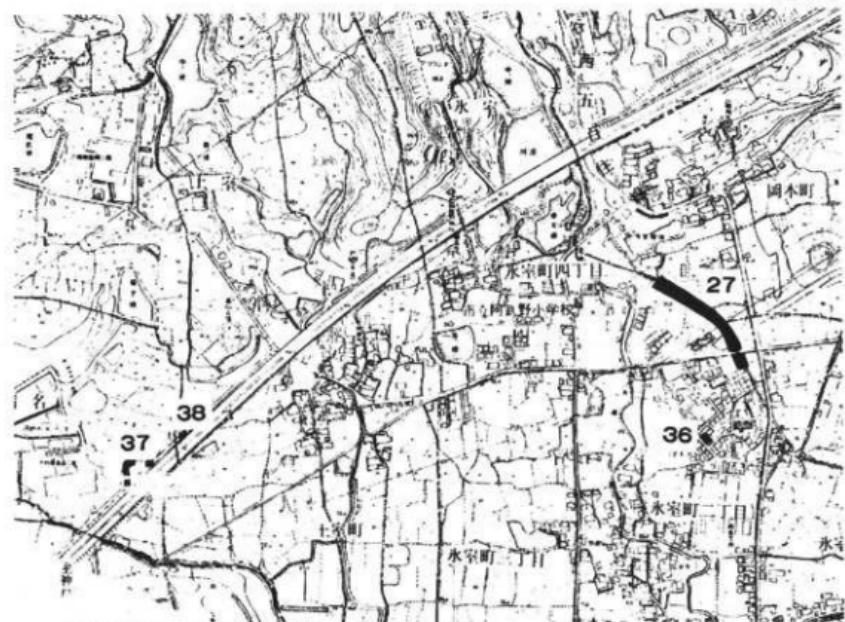
b 民俗文化財展（農機具など）



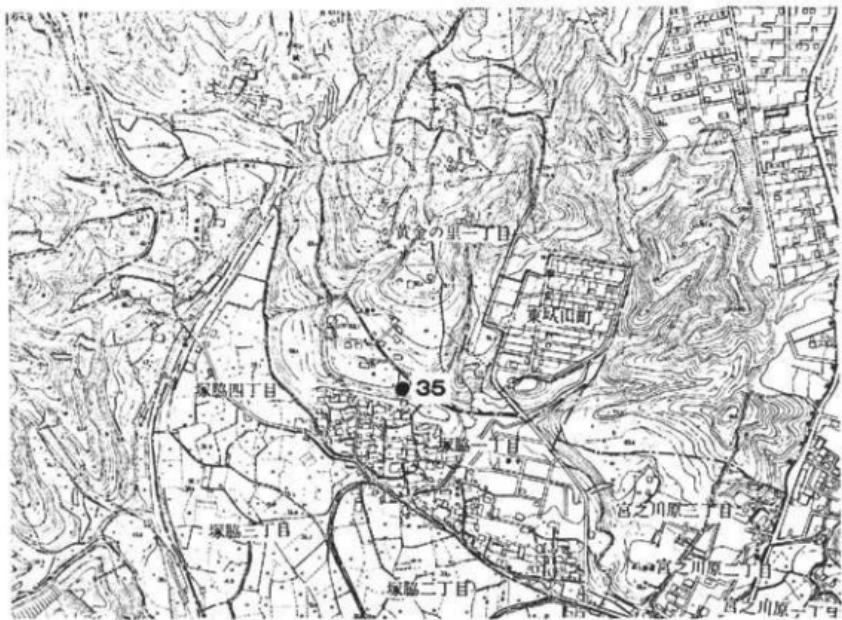
a 安満遺跡



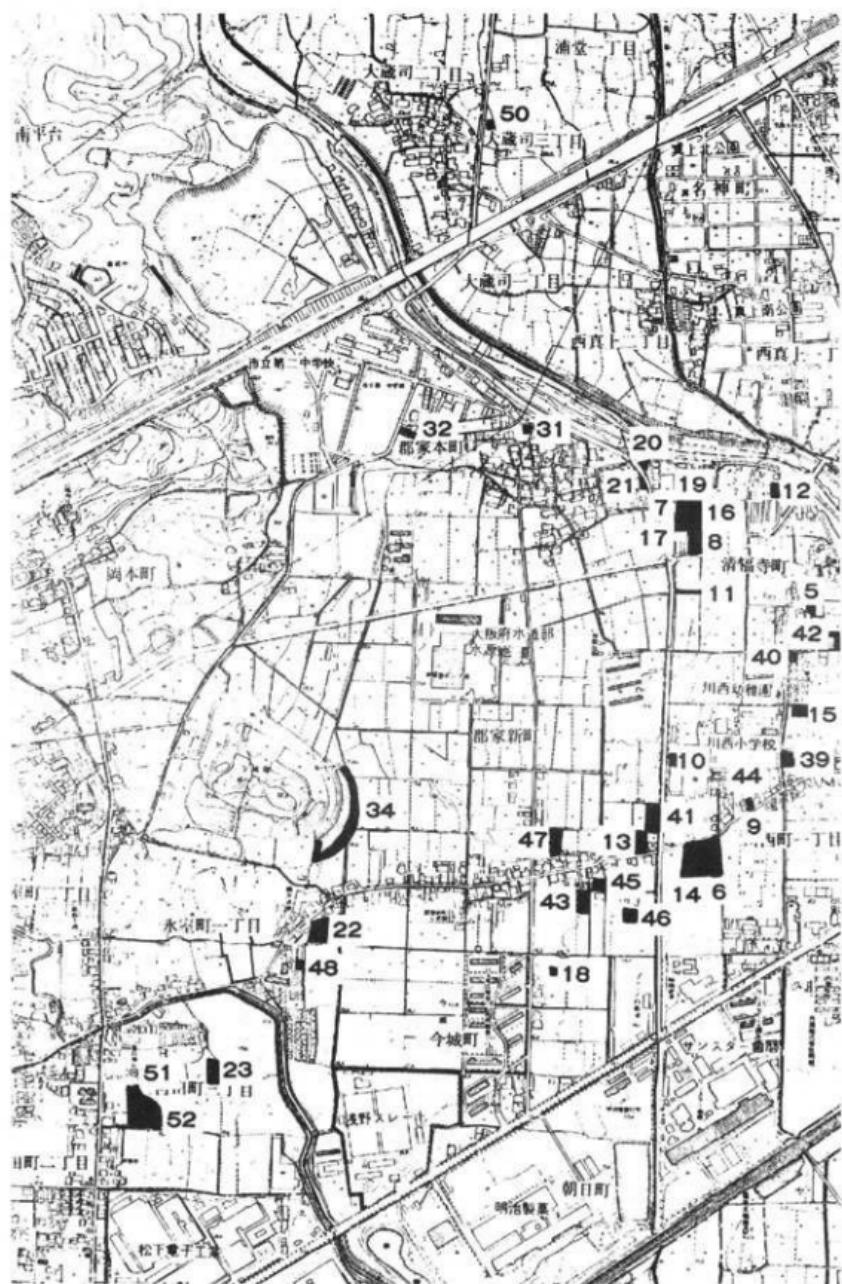
b 富田・中城遺跡



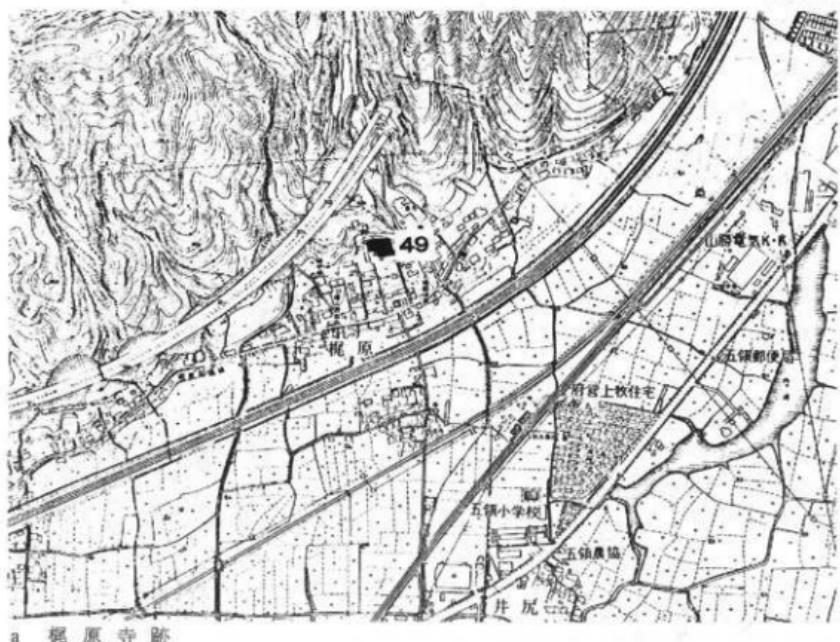
a 上水室遺跡・二子山・土保山・水室塚古墳



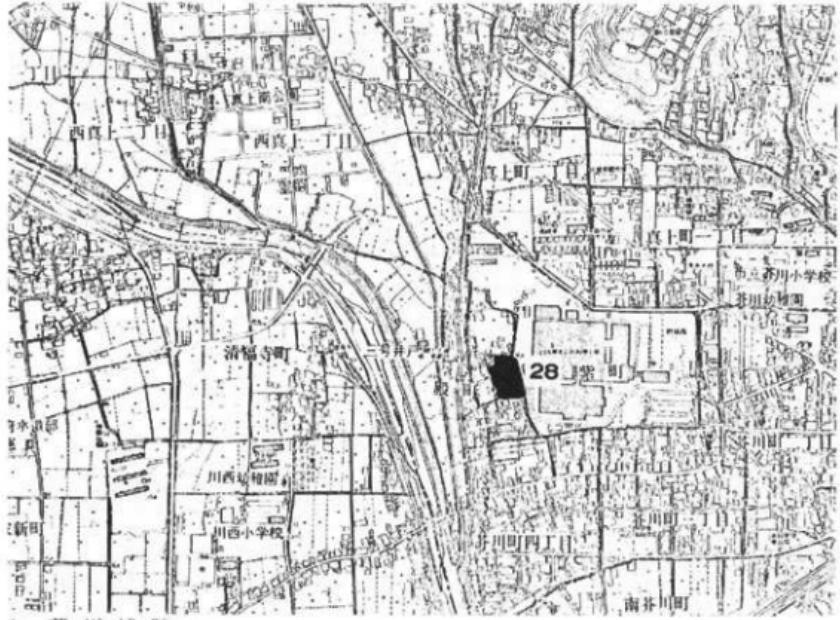
b 塚脇 X-1 号墳



今城塚古墳、嶋上郡衙跡、郡家今城・郡家本町・大藏司・宮田遺跡



a 桜原寺跡



b 芥川城跡



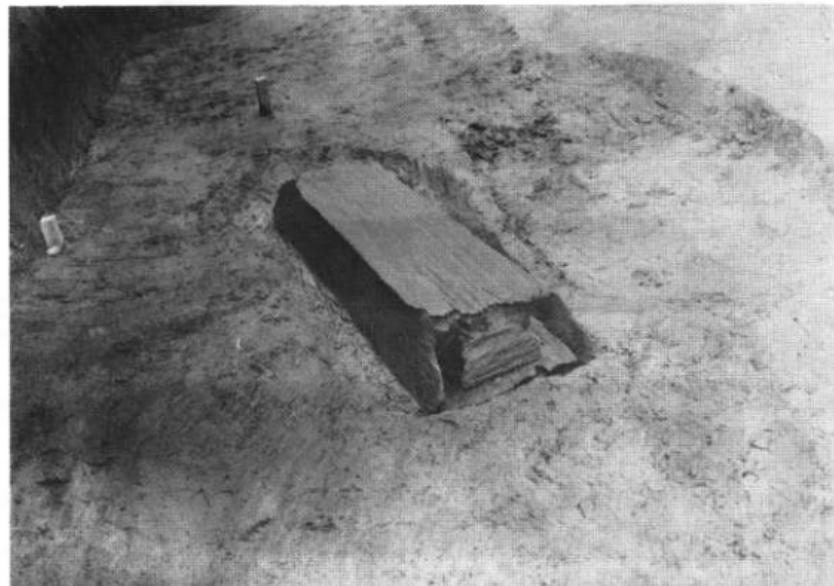
a (埋1) 溝状遺構(東南側から)



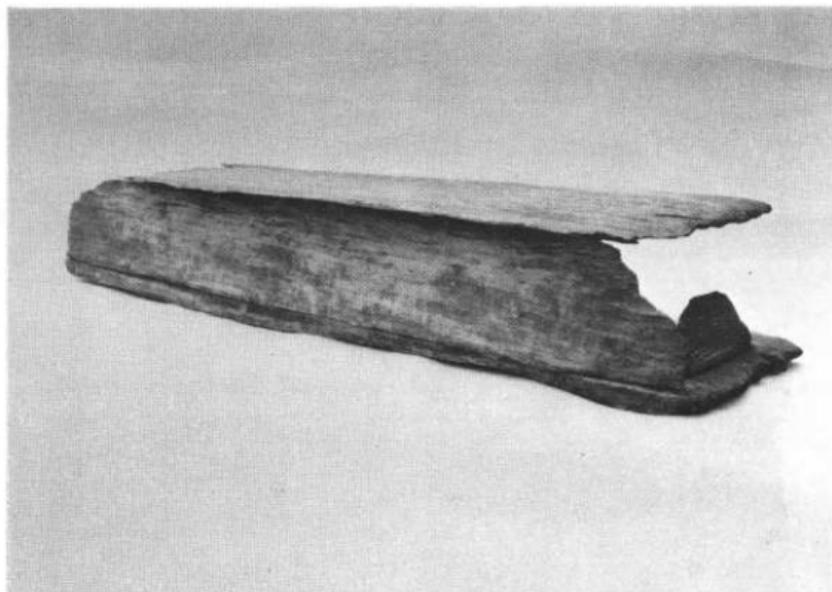
b (埋2) 方形周溝墓群(北側から)



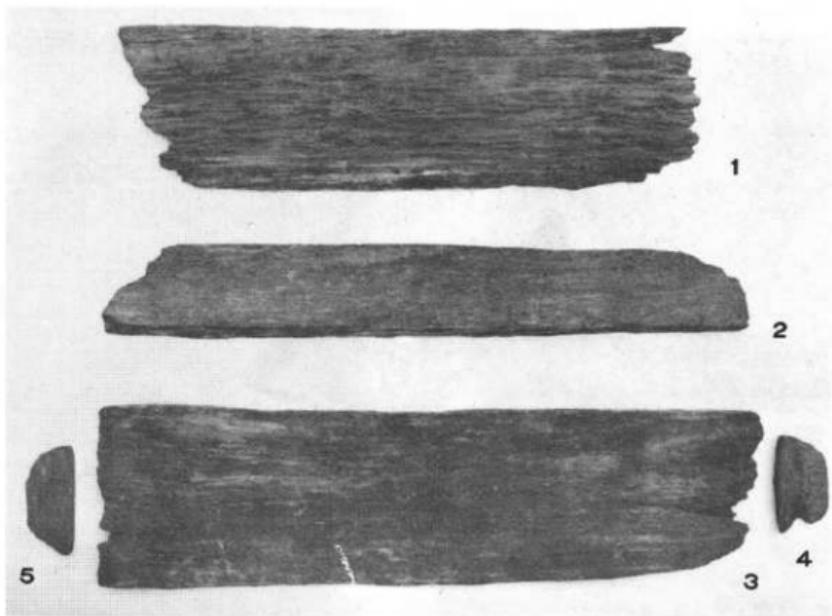
a (埋2) 1号方形周溝墓（西側から）



b (埋2) 木棺出土状況（北側から）



a (埋 2) 木 棺



b (埋 2) 木 棺、蓋(1)・側板(2)・底板(3)・木口板 (4・5)



a (埋4) 溝および掘立柱建物跡（北側から）



b (埋4) 溝（北側から）



a (塙 7) 遺構全景 (南側から)



b (塙 7) 遺構全景 (北側から)



a (埋8) 遺構全景(南側から)



b (埋8) 遺構全景(北側から)



a (埋 12) 遺構全景 (南側から)



b (埋 12) 堅穴式住居址 (西側から)



a (埋18) 山陽道跡(南側から)



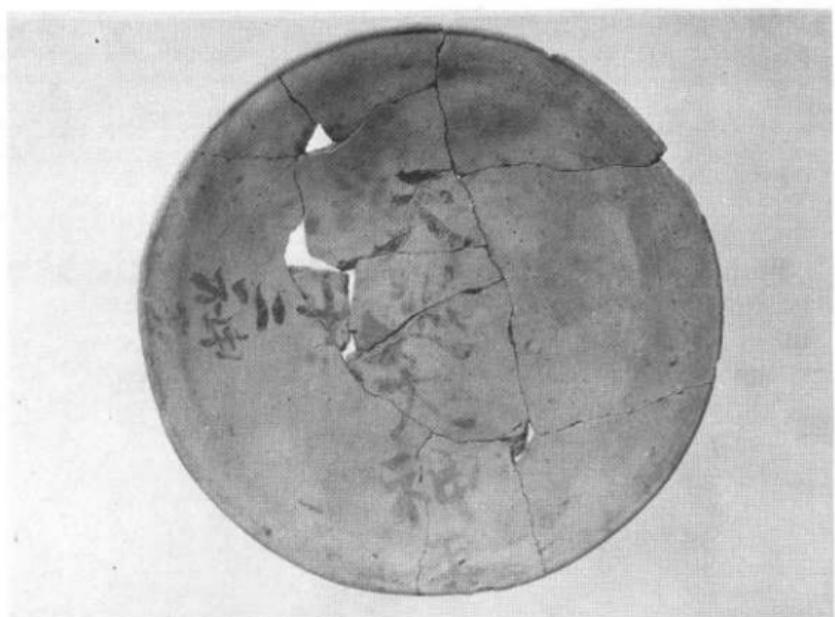
b (埋18) 山陽道跡(北側から)



a (墳 16) 遺構全景 (南側から)



b (墳 16) 遺構全景 (北側から)



a (埋 16) 井戸下層出土の墨書き土器



b (埋 16) 井戸下層出土の墨書き土器

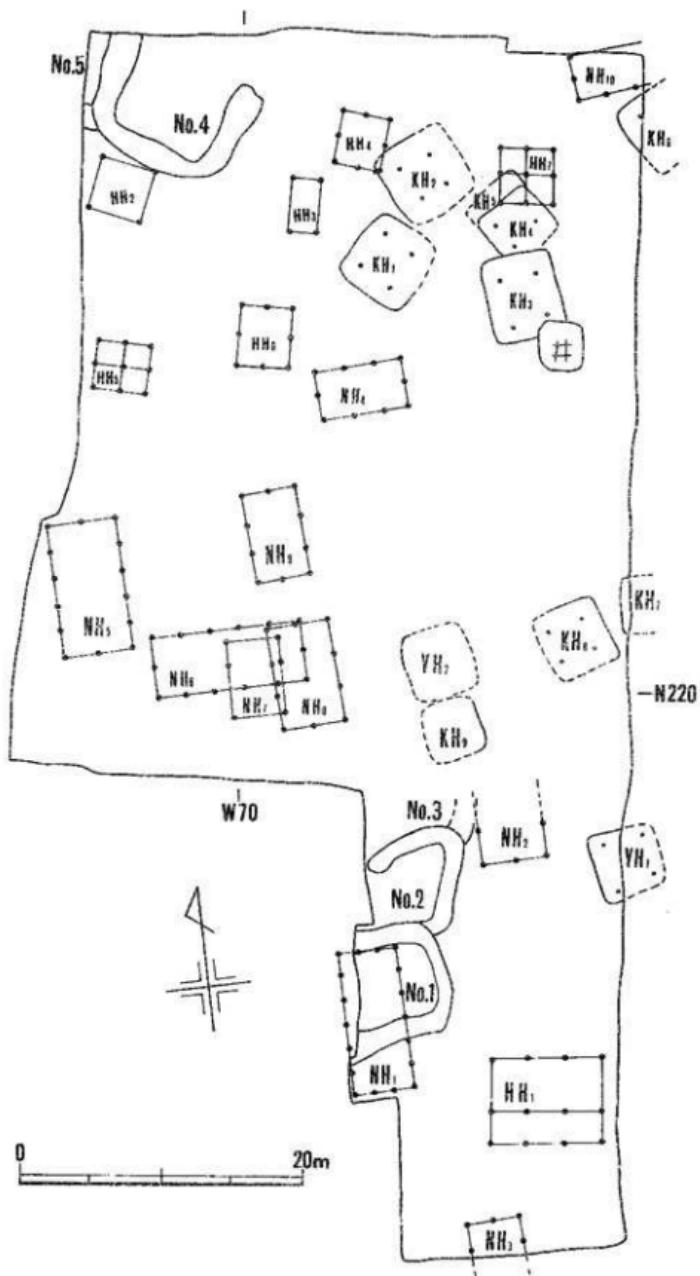


a (埋 17) 掘立柱建物跡 (東側から)



b (埋 19) 塚穴式住居址および掘立柱建物跡 (南側から)

鳴上郡衙跡



(埋7, 8, 16, 17, 19)遺構配置図



a (埋24) 遺構全景(北側から)



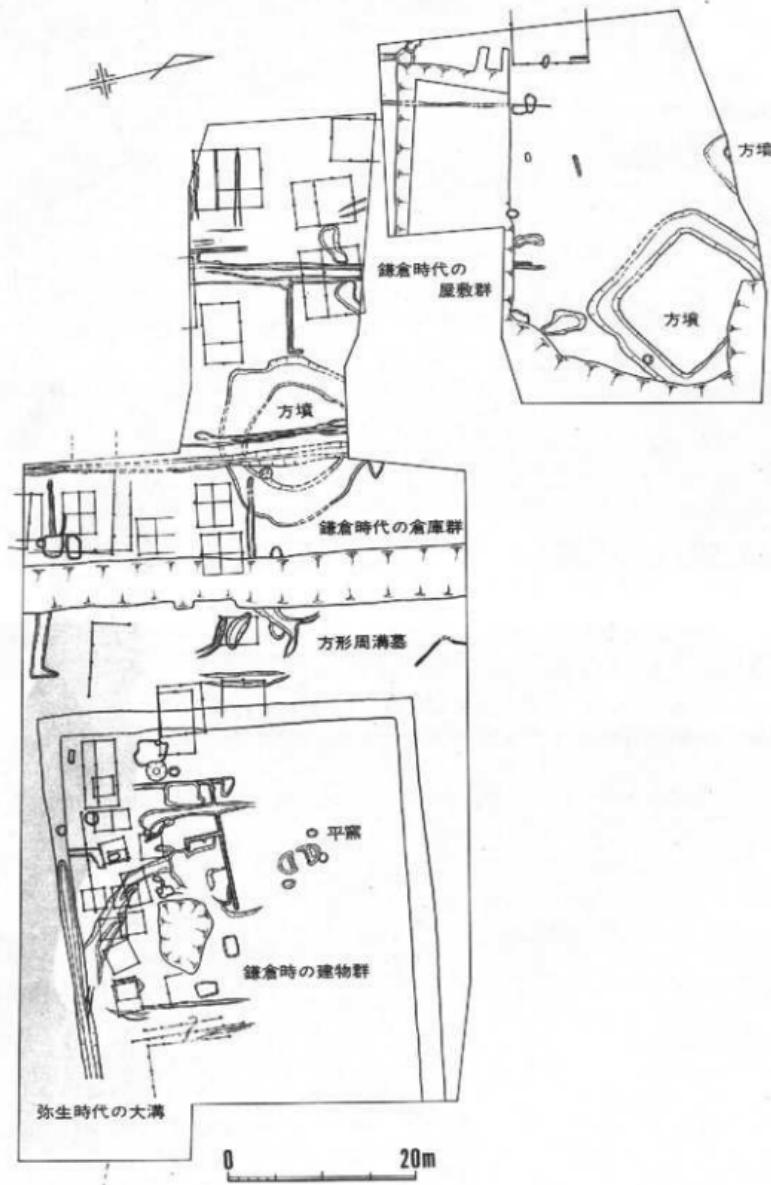
b (埋24) 遺構全景(東側から)



a (埋 24) 遺構全景 (西側から)



b (埋 28) 遺構全景 (西側から)



(墓 24.26) 遺構実測図



a (埋 30) 挖立柱建物跡および土壙墓（北側から）



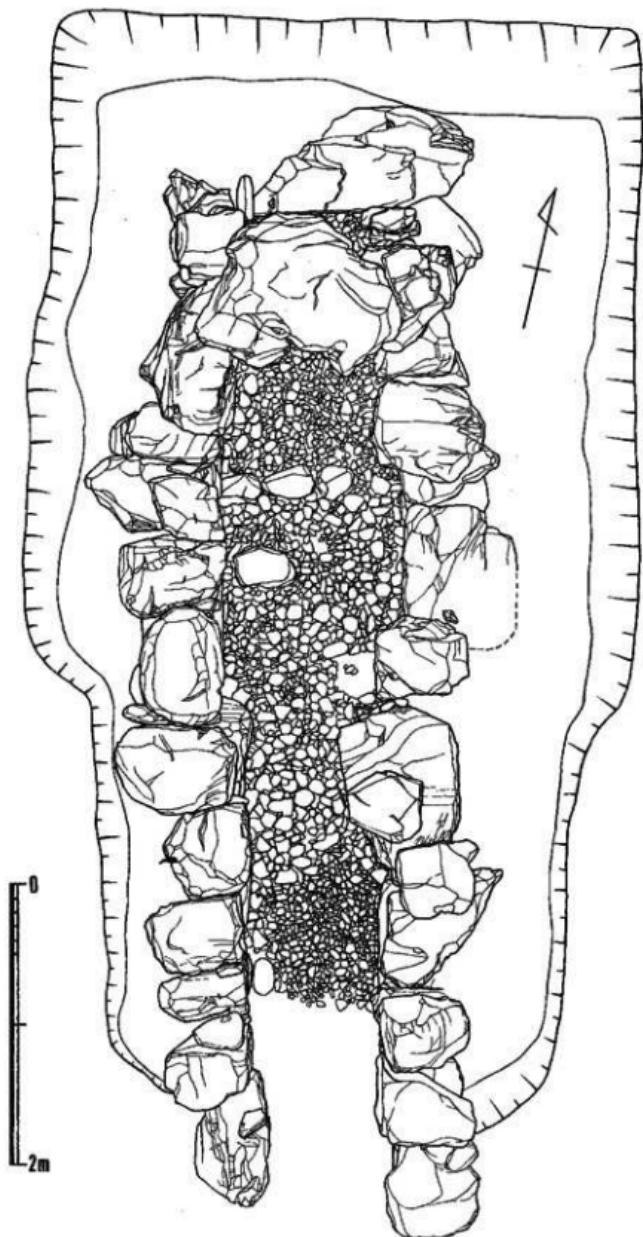
b (埋 30) 挖立柱建物跡および井戸（南側から）



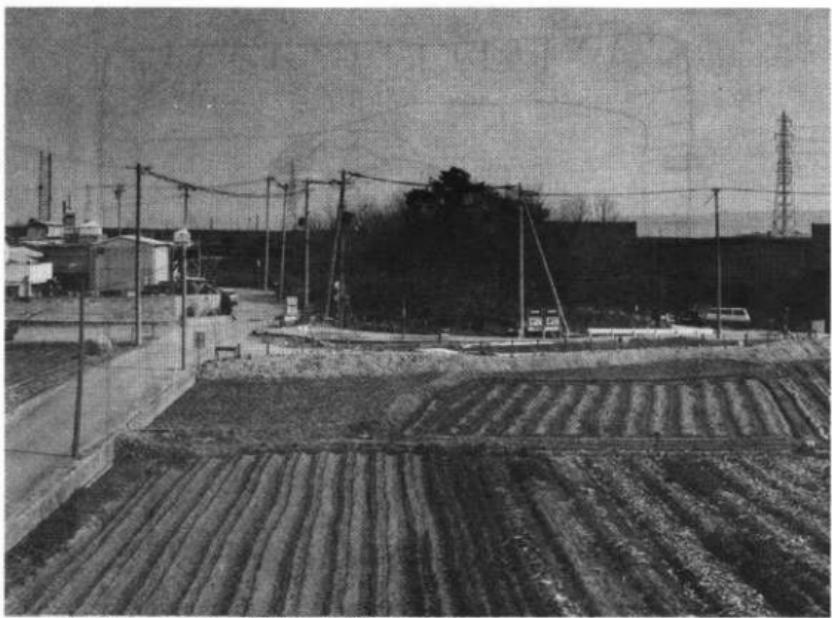
a (埋 85) 塚脇 X-1 号墳石室全景(南側から)



b (埋 85) 塚脇 X-1 号墳石室全景(北側から)



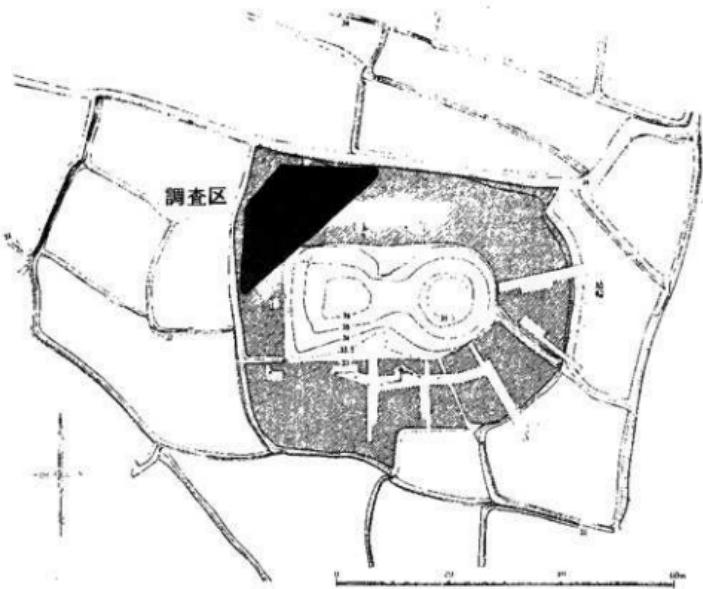
(墓 35) 塚脇 X - 1 号墳石室実測図



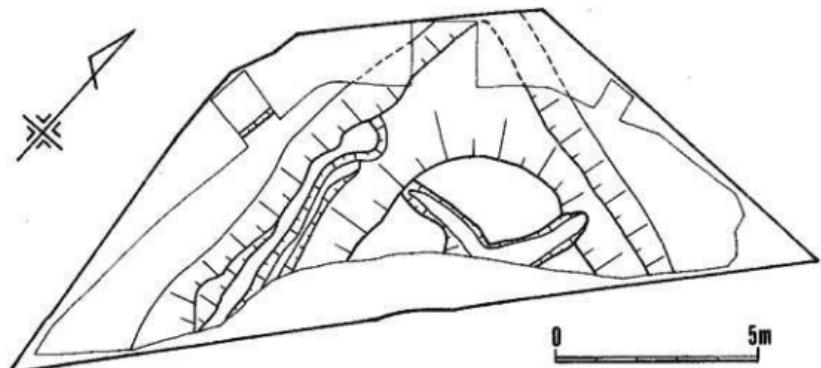
a (墓 37) 二子山古墳全景 (西側から)



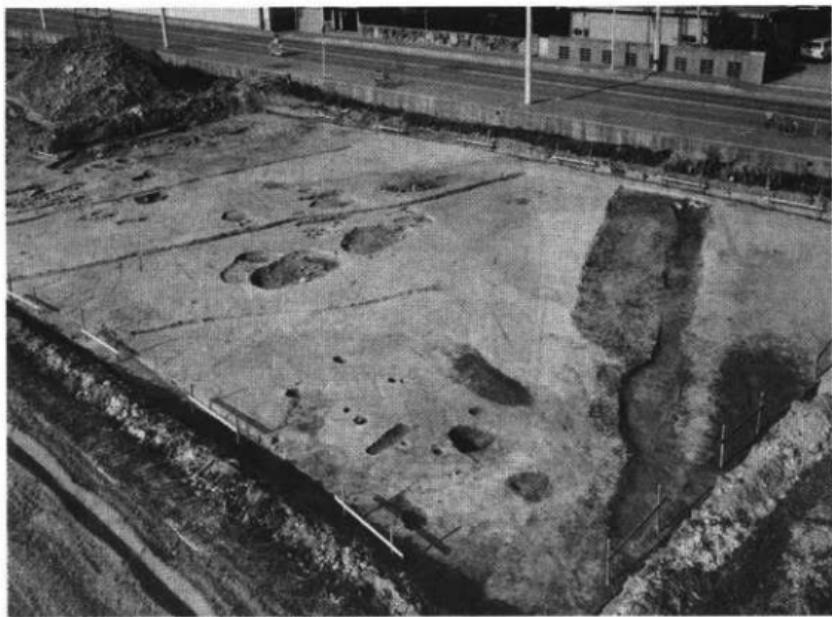
b (墓 37) 前方部基底面 (北側から)



a (墓 37) 測量図



b (墓 37) 遺構実測図



a (埋41) 遺構全景(西南側から)



b (埋41) 莓状遺構(西北側から)



a (墳 48) 方形墳と土壙墓（北側から）



b (墳 48) 方形墳（南側から）



a (埋 45) 瓦窯跡 (南側から)



b (埋 45) 井戸 (南側から)